

JFA 中期計画 2015-2022

別添資料



公益財団法人日本サッカー協会

目 次

I . JFA 活動年表 2005-2014	1
II . 「アクションプラン 2015」総括	13
III . サッカーファミリー調査	21
IV . 組織力調査	29

I. JFA 活動年表 2005-2014

ここでは、「JFA 中期計画 2015-2022」本編の補足資料として、JFA が 2005 年から 2014 年末までに取り組んできた主な活動・施策を年表にて整理する。ここで整理した内容は、JFA が新たに取り組み始めた活動、これまで実施していたが、大きく実施方法などを変更した内容を中心に整理した。したがって、毎年実施している大会やフェスティバルや各種研修会などの内容は記載していない。

2005		
普及		1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
1 月	指導者	「第 4 回フットボールカンファレンス」開催(千葉)
2 月	審判	「JFA スペシャルレフェリートレーニングキャンプ」を初開催
3 月	審判 (フ)	「フットサル審判インストラクター制度」を策定
3 月	指導者	「公認 GK-A 級コーチ養成講習会」を初開催
3 月	指導者	「公認 47FA チーフインストラクター養成研修会」を初開催
5 月・8 月	審判	「2005 JFA Media Conference on Refereeing」を特別開催
8 月	審判	「第 29 回全日本少年サッカー大会決勝大会」でユース審判員の育成講習会を初開催
9 月	サポーター	日本代表キャッチフレーズのサポーター投票を実施、「SAMURAI BLUE2006」に決定
12 月	審判	審判員フィジカルトレーナーを専任化
12 月	審判	「JFA レフェリーカレッジ」1 期生が終了認定
強化		2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
3 月	育成	ナショナルトレセン U-14 を 1 カ所 2 コース開催から東日本西日本の 2 地域開催へ変更
4 月	代表 (ビ)	ビーチサッカーの取り組みをスタート、ビーチサッカー日本代表を初編成 (FIFA がビーチサッカーを傘下に)
4 月	育成	サッカーによる真の国際人育成支援事業調印式 (JFA アカデミー創設に向けて)
5 月	育成 (女)	「ナショナルトレセンコーチ(女子担当)」を新設
6 月	育成 (女)	「地域女子トレセンコーチ研修会」を初開催
8 月～11 月	育成	JFA アカデミー福島、1 期生選考試験
8 月	国内競技会 (フ)	「全日本大学フットサル大会」を創設
9 月	育成	フランスサッカー連盟 INF(男子育成機関)/CNFE(女子育成機関)と JFA アカデミー福島とのパートナーシップ協定締結
10 月	育成	「ナショナル GK/ストライカーキャンプ」を初めて東西で開催
12 月	育成 (女)	「ナショナルトレセン女子 U-15」を初開催
<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>		
2 月～8 月	代表	日本代表、2006FIFA ワールドカップドイツ アジア最終予選 ※世界最速で 3 大会連続の本大会出場を決定
4 月	代表 (女)	U-17 日本女子代表、AFC U-17 女子選手権 韓国 2005 ※優勝
5 月	代表 (ビ)	ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ ブラジル 2005 ※4 位
5 月	代表 (フ)	フットサル日本代表、AFC フットサル選手権 ベトナム 2005 ※準優勝
6 月	代表	日本代表、FIFA コンフェデレーションズカップ ドイツ 2005 ※グループステージ敗退
6 月	代表	U-20 日本代表、FIFA ワールドユース選手権 オランダ 2005 ※ベスト 16
7 月・8 月	代表	日本代表、東アジアサッカー選手権 2005 決勝大会 ※2 位
8 月	代表 (女)	なでしこジャパン、東アジア女子サッカー大会 ※3 位
<国内リーグ関連>		
4 月	リーグ (女)	「なでしこスーパーカップ」を創設(なでしこリーグと全日本女子選手権の各優勝チームの対戦)
4 月	Fリーグ (フ)	「フットサル全国リーグ設立検討プロジェクト」を発足
組織		3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
1 月	組織	「JFA2005 年宣言」を発表(1 月 1 日/国立競技場)、「業務プラン 2008」を制定
2 月	国際	北澤豪 JFA 国際委員(JFA アンバサダー)がシリアでサッカー教室
5 月	組織	「日本サッカー殿堂」がオープン、第 1 回掲額式典
5 月	国際	「ミドルセックスワンダラーズ JAPAN TOUR 2005 創立 100 周年記念大会」を開催(兵庫、静岡、東京)
6 月	社会貢献	地球温暖化防止国民活動「チームマイナス 6%」に参加
7 月	国際	「ユネスコ寺子屋運動くるりんぱプロジェクト～アジアの子どもたちにサッカーボールを届けるプロジェクト」スタート
9 月	組織 (ビ)	JFA フットサル委員会の中にビーチサッカー部会を新設
12 月	国際	川淵三郎キャプテンが AFC ダイヤモンド・オブ・アジアを受賞
12 月	国際競技会	「FIFA クラブワールドチャンピオンシップ トヨタカップ ジャパン 2005」開催(12 月 11 日～18 日/東京、神奈川、愛知)

※ (女) は女子サッカー、(フ) はフットサル (女子のフットサルを含む)、(ビ) はビーチサッカー関連であることを示す。

2006		
普及		
1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・		
3 月～6 月	サポーター	「SAMURAI BLUE 2006 プロジェクト」を展開
4 月	指導者	公認 A 級コーチ養成講習会、推薦枠を新設
4 月	審判	「レフェリーフィジカルトレーナー」を設置
5 月	審判	(フ) 「フットサル 1 級審判員昇級制度」設置を決定
5 月	普及	公認キッズリーダーの指導者登録をスタート
5 月	審判	「JFA レフェリーカレッジ」のオープンカレッジを初開催
6 月	審判	上川徹主審、廣嶋禎数副審、2006FIFA ワールドカップドイツで、グループステージ 2 試合 3 位決定戦を担当
6 月	普及	(女) 「サッカーやろうよ！ 女子チーム検索サイト」を公式ホームページ内に開設
10 月	指導者	「JFA コミュニティ」サイトをリニューアル(従来の指導者向けのほか審判員向けゾーンも新設)
10 月	普及	「JFA チャレンジゲーム～めざせクラッキ」をリリース
12 月	審判	「審判トレセン」の創設を決定
12 月	審判	地域/都道府県協会の審判研修会へのスペシャルレフェリー派遣をスタート
強化		
2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・		
1 月	育成	地域/都道府県トレセンコーチのライセンスを義務化
3 月	代表	「Go for 北京プロジェクト」立ち上げ(日本・中国・韓国の北京オリンピック世代の強化、国際交流)
4 月	育成	「JFA アカデミー福島」開校(4 月 8 日)
7 月	育成	「2 種・3 種リーグ改革プロジェクト」の骨子を決定
10 月	国内競技会	(ビ) 「全国ビーチサッカー大会」を初開催(沖縄)
11 月	育成	「JFA アカデミー福島」基本方針を発表
＜各カテゴリー日本代表の主な出場大会＞		
4 月	代表	(女) U-20 日本女子代表、AFC U-20 女子選手権 マレーシア 2006 ※4 位
5 月	代表	(フ) フットサル日本代表、AFC フットサル選手権 ウズベキスタン 2006 ※初優勝
5 月	代表	(ビ) ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ アジア地区予選 ※準優勝、世界大会出場権獲得
6 月	代表	日本代表、2006 FIFA ワールドカップ ドイツ ※グループステージ敗退
7 月	代表	(女) なでしこジャパン、AFC 女子アジアカップ オーストラリア 2006 ※4 位
9 月	代表	U-16 日本代表、AFC U-17 選手権 シンガポール 2006 ※優勝
10 月～11 月	代表	U-19 日本代表、AFC ユース選手権 インド 2006 ※準優勝
11 月～12 月	代表	(女) なでしこジャパン、第 15 回アジア競技大会(2006/ドーハ) ※準優勝
11 月	代表	(ビ) ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ リオデジャネイロ 2006 ※ベスト 8
＜国内リーグ関連＞		
3 月	J リーグ	「J リーグ準加盟クラブ」募集要項を発表
4 月	F リーグ	(フ) フットサル全国リーグの設立を決定
11 月	F リーグ	(フ) フットサル全国リーグの概要と参加チームを発表
組織		
3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・		
3 月	国際	「AFC 加盟協会向け JFA 公認 C 級コーチ養成コース」を初開催
5 月	マーケティング	アディダスジャパンとオフィシャルサプライヤー契約
5 月	国際	川淵三郎氏、AFC プロリーグ特別委員会委員長に就任、第 1 回委員会を JFA ハウスで開催
6 月	国際	川淵三郎氏、FIFA 功労賞を受賞
7 月	組織	川淵三郎氏、JFA 会長再選(3 期目)
10 月	ミュージアム	日本サッカーミュージアムがリニューアルオープン
12 月	国際競技会	「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ ジャパン 2006」開催(12 月 10 日～17 日/東京、神奈川、愛知)

※(女)は女子サッカー、(フ)はフットサル(女子のフットサルを含む)、(ビ)はビーチサッカー関連であることを示す。

2007		
普及		1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
1 月	指導者	「第 5 回フットボールカンファレンス」開催(1 月 5 日～7 日/大阪)
1 月	指導者 (女)	「女子:公認 C 級コーチ養成講習会」を開催
4 月	審判	「審判トレーニングセンター」をスタート
5 月	指導者	「公認 B 級コーチ養成講習会」を 12 コース増設、推薦枠を増加、E ラーニングコースを新設
6 月	指導者	「公認 A 級コーチ U-12 養成講習会」を新設
7 月	審判	E-learning によるサッカー4 級審判更新講習会をスタート
10 月	普及	「JFA チャレンジゲーム～めざせファンタジスタ！」をリリース
10 月	審判 (ビ)	ビーチサッカー審判講習会を初開催
強化		2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
3 月	育成	「地域ユースダイレクター」「47FA ユースダイレクター」を設置
4 月	育成 (女)	「女子特別指定選手制度」をスタート
5 月	育成	「地域トレーニングキャンプ U-17」をスタート
5 月	育成	ナショナルトレセン U-14、東中西 3 地域、年 2 回開催へ変更
5 月	育成	「ナショナルトレセン U-16」を「ナショナルトレーニングキャンプ U-16」に変更、東西 2 地域、年 2 回開催へ
6 月	育成	「2 種 3 種リーグ改革支援制度」を決定
12 月	国内競技会	「JFA マッチコミッショナー制度」を導入
12 月	育成	「U-17 地域対抗戦」を初開催
<p><各カテゴリー日本代表の主な出場大会></p>		
3 月	代表 (女)	U-16 日本女子代表、AFC U-16 女子選手権大会 マレーシア 2007 ※準優勝、世界大会出場権獲得
4 月～8 月	代表 (女)	日本女子代表、アジア女子サッカー2008 最終予選 ※北京オリンピック出場権獲得
5 月	代表 (フ)	フットサル日本代表、AFC フットサル選手権大会 日本 2007 ※準優勝
7 月	代表	日本代表、AFC アジアカップ 2007 ※ベスト 4
7 月	代表	U-20 日本代表、FIFA U-20 ワールドカップ カナダ 2007 ※ベスト 16
8 月	代表	U-17 日本代表、FIFA U-17 ワールドカップ 韓国 2007 ※グループステージ敗退
8 月～11 月	代表	U-22 日本代表、アジア男子サッカー2008 最終予選 ※北京オリンピック出場権獲得
9 月	代表 (女)	日本女子代表、FIFA 女子ワールドカップ 中国 2007 ※グループステージ敗退
10 月	代表 (女)	U-19 日本女子代表、AFC U-19 女子選手権大会 中国 2007 ※準優勝、世界大会出場権獲得
10 月～11 月	代表 (フ)	フットサル日本女子代表を初結成、第 2 回アジアインドアゲームズ マカオ 2007 ※優勝
11 月	代表 (ビ)	ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ リオデジャネイロ 2007 ※グループステージ敗退
<p><国内リーグ関連></p>		
3 月～11 月	J リーグ	AFC チャンピオンズリーグ ※浦和レッズ優勝
9 月～2 月	F リーグ (フ)	日本フットサルリーグ「F リーグ」が開幕(9 月 23 日)
組織		3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
1 月～12 月	国際	JFA 局内に「AFC プロリーグプロジェクト」を発足
1 月・2 月	社会貢献	「JFA こころのプロジェクト」トライアル授業を実施
3 月	社会貢献	「環境プロジェクト」を立ち上げ
3 月	組織	「業務プラン 2010」を策定
4 月	社会貢献	「JFA こころのプロジェクト」本格スタート
5 月	国際	小倉純二 JFA 副会長が FIFA 理事に再選
5 月	国際競技会 (フ)	「AFC フットサル選手権 日本 2007」を大阪府・兵庫県で開催
6 月	組織 (女)	「なでしこ vision」を発表
7 月～8 月	社会貢献	平成 19 年新潟県中越沖地震に対する救援活動
12 月	国際競技会	「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ ジャパン 2007」開催(12 月 7 日～16 日/東京、神奈川、愛知)※浦和が 3 位入賞
12 月	医学	聖マリアンナ医科大学が FIFA メディカルセンター川崎として認定(12 月 14 日)
12 月	組織	「記念事業推進委員会」解散、2002FIFA ワールドカップ記念事業が終了
12 月	国際	川淵三郎氏が南米サッカー連盟より特別勲章を受章

※ (女) は女子サッカー、(フ) はフットサル (女子のフットサルを含む)、(ビ) はビーチサッカー関連であることを示す。

2008	
普及	1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
1 月	指導者 (女) 「女子:公認 C 級コーチ養成講習会」を初開催
3 月	指導者 「公認 A 級コーチ U-12 養成講習会(S 級ショートコース)」を開設
3 月	普及 「JFA フットボールデー(9 月 10 日)」の創設を決定
4 月	サポーター 「チケット JFA」にてチケット販売サービスをスタート
4 月～6 月	サポーター 日本代表特設サポーターズサイトを設置
5 月	審判 キリンカップサッカーで来日したポルトガル審判員の講演会を開催
8 月～11 月	審判 「審判交流プログラム」をスタート(8 月～9 月/ポーランド、10 月～11 月/韓国)、ポーランド審判員講演会を開催(8 月)
12 月	指導者 (フ) 「フットサル C 級コーチ養成講習会」「同 D 級コーチ養成講習会」「同 D 級コーチインストラクター研修会」の開設決定
強化	2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
1 月	育成 (女) 「なでしこジャパン育児サポート制度」を制定
1 月	育成 「U-12 モデル地区トレセンライアル」の実施を決定
1 月	国内競技会 「国体改革プロジェクト」を新設
3 月	育成 「JFA アカデミー熊本宇城」の開校を決定
6 月	育成 「JFA2005 年宣言」実現に向けたロードマップを策定
<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>	
2 月	代表 日本代表、東アジアサッカー選手権 2008 決勝大会 ※準優勝
2 月	代表 (女) なでしこジャパン、東アジア女子サッカー選手権 2008 決勝大会 ※初優勝、公式大会初タイトルを獲得
3 月	代表 (女) なでしこジャパン、CYPRUS WOMEN'S CUP 2008 ※3 位
5 月～6 月	代表 (女) なでしこジャパン、AFC 女子アジアカップ ベトナム 2008 ※3 位
5 月	代表 (フ) フットサル日本代表、AFC フットサル選手権 タイ 2008 ※3 位
7 月	代表 (ピ) ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ マルセイユ 2008 ※1 次ラウンド敗退
8 月	代表 (女) なでしこジャパン、北京オリンピック 2008 ※ベスト 4
8 月	代表 U-23 日本代表、北京オリンピック 2008 ※グループステージ敗退
9 月～10 月	代表 (フ) フットサル日本代表、FIFA フットサルワールドカップ ブラジル 2008 ※グループステージ敗退
10 月～11 月	代表 U-19 日本代表、AFC U-19 選手権 サウジアラビア 2008 ※準々決勝敗退、世界大会出場権を逃す
10 月	代表 U-16 日本代表、AFC U-16 選手権 ウズベキスタン 2008 ※3 位、世界大会出場権獲得
10 月～11 月	代表 (女) U-17 日本女子代表、FIFA U-17 ワールドカップ ニュージーランド 2008 ※ベスト 8
11 月～12 月	代表 (女) U-20 日本女子代表、FIFA U-20 ワールドカップ チリ 2008 ※ベスト 8
<国内リーグ関連>	
3 月～11 月	リーグ AFC チャンピオンズリーグ ※ガンバ大阪優勝
7 月	国際競技会 「スルガ銀行チャンピオンシップ 2008 OSAKA リーグヤマザキナビスコカップ/コパ・スタメリカーナ王者決定戦」を初開催 ※ガンバ大阪が出場
8 月	リーグ 「JOMO オールスターサッカー」を廃止、「JOMO CUP オールスターサッカー」を初開催 ※リーグの東西対抗戦→リーグ×リーグの対抗戦に
9 月	リーグ Jリーグに AFC 加盟国選手の選手登録枠(アジア枠)を創設
組織	3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
1 月	組織 群馬県協会が法人化し、全ての都道府県サッカー協会が法人化完了
4 月	国際 「JFA インターナショナルレフェリーインストラクターコース 2008(AFC 加盟協会向け)」を初開催
5 月	マーケティング 三井住友海上火災保険株式会社と日本代表チームサポーターズカンパニー契約を締結
5 月	施設 「JFA グリーンプロジェクト」ポット苗方式・芝生化モデル事業 ポット苗無償提供キャンペーンをスタート
7 月	組織 犬飼基昭氏、第 11 代 JFA 会長就任
7 月	国際 「デットマール・クラマー氏を囲む会」を開催
7 月～	社会貢献 「JFA こころのプロジェクト」夢の教室を海外で初開催(7 月/マーシャル諸島、10 月/インドネシア)
9 月	国際 小倉純二副会長が東アジアサッカー連盟会長に就任
11 月	国際 長沼健氏が AFC ダイヤモンド・オブ・アジアを受賞
12 月	国際競技会 「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップジャパン 2008」開催(12 月 11 日～21 日/東京、神奈川、愛知) ※ガンバ大阪が 3 位入賞
12 月	社会貢献 「リスペクトプログラムの推進」を決定
12 月	ミュージアム 「日本サッカーミュージアム 5 周年記念パーティー」を開催

※(女)は女子サッカー、(フ)はフットサル(女子のフットサルを含む)、(ピ)はビーチサッカー関連であることを示す。

2009		
普及		1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
1 月	指導者	「第 6 回フットボールカンファレンス」開催(1 月 16 日～18 日/石川)
2 月	審判	スペシャルレフェリー(SR)をプロフェッショナルレフェリーに名称を変更、副審 2 人とプロ契約
2 月・3 月	指導者 (フ)	「フットサル C 級コーチ養成講習会」を初開催
5 月	審判	「KIRIN CUP SOCCER 2009 Conference on Refereeing」を開催
8 月・10 月	審判	審判交流プログラム(8 月、10 月/ポーランド)
9 月	審判	「ワールドカップ出場レフェリー講演会」を開催
10 月	普及 (女)	「サッカーやろうよ!～女子チーム活動サポート」をスタート(「女子チーム活動サポート窓口」の開設)
10 月～11 月	審判	「MA レフェリーズコース」を日本で初開催
12 月～5 月	サポーター	日本代表応援「SAMURAI BLUE CROW」プロジェクト
12 月	サポーター	JFA 公認日本代表応援ソングを EXILE が制作
強化		2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
2 月	育成	強化・育成の体制を変更、技術委員長を技術委員長(強化)と技術委員長(育成)の 2 名体制へ
4 月	育成	JFA アカデミー熊本宇城が開校
4 月	育成	「ポカリスエット U-12 サッカーリーグ」を創設
5 月	育成	「U-20 ジャパンズエイト(8 人制大会)」を創設
9 月	育成 (女)	JFA エリートプログラム女子、JOC 日韓競技力向上スポーツ交流事業の一環として初めて女子を対象に開催
12 月	育成	「ナショナルトレセン U-12」、地域によって複数回開催する方針を決定
		<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>
8 月	代表 (女)	U-19 日本女子代表、AFC U-19 女子選手権 中国 2009 ※優勝、世界大会出場権獲得
10 月	代表	U-17 日本代表、FIFA U-17 ワールドカップ ナイジェリア 2009 ※グループステージ敗退
11 月	代表 (女)	U-16 日本女子代表、AFC U-16 女子選手権 タイ 2009 ※3 位、世界大会出場権獲得
11 月	代表 (ビ)	ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ ドバイ 2009 ※ベスト 8
		<国内リーグ関連>
3 月	F リーグ (フ)	F リーグで「U-23 選手枠」の創設、通常選手枠最大 20 名を 14 名に縮小することを決定
組織		3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
2 月	国際	2018 年、2022 年 FIFA ワールドカップ招致への意思表示
3 月	医学	スポーツ医学委員会内に「アンチ・ドーピング部会」を新設
6 月	国際	「日メコンサッカー交流プログラム」に協力(サッカー対抗戦、夢の教室の実施など)
7 月	社会貢献	「国連グローバル・コンパクト」に署名
7 月	社会貢献	「リスペクトプロジェクト」を発表、ハンドブックなど配布
7 月	社会貢献	「JFA こころのプロジェクト」リーグと F リーグのクラブが合同で初開催
8 月	医学	JFA メディカルセンターがオープン(福島県)
9 月	国際	「JFA DREAM ASIA PROJECT」を立ち上げ(支援企業を募りアジア貢献事業を推進)
10 月	国際	2018/2022FIFA ワールドカップ招致委員会を設立
11 月	組織	川淵三郎名誉会長が旭日重光章を受章
11 月	国際	藤田一郎 JFA 元国際委員が AFC 功労賞(30 年賞)を受賞
12 月	国際	2018/2022FIFA ワールドカップ招致契約書を FIFA に提出

※(女)は女子サッカー、(フ)はフットサル(女子のフットサルを含む)、(ビ)はビーチサッカー関連であることを示す。

2010		
普及		1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
3 月	審判	(女) 女子 1 級審判員強化研修会を年 3 回に、2 級審判員(女子)指導育成講習会を年 2 回に増設
3 月	指導者	「公認キッズリーダーチーフインストラクター研修会」「公認キッズコーチ研修会」を新設
4 月～11 月	審判	(女) 審判交流プログラム(4 月・12 月/オーストラリア女子審判員、5 月・7～8 月/イングランド、10 月～11 月/ポーランド)
5 月	サポーター	日本サッカー協会公式携帯サイト「JFAサッカーモバイル」を開設
5 月	サポーター	SAMURAI BLUE 出陣式・SAMURAI BLUE PARK キックオフイベント(東京都)
5 月	普及	「FIFA グラスルーツリフレッシュ研修」を初開催(育成年代指導者養成プロジェクトの一環)
5 月	普及	「FIFA グラスルーツセミナー」を初開催(育成年代指導者養成プロジェクトの一環)
5 月～6 月	サポーター	SAMURAI BLUE PARK(日本代表応援拠点)を設置(東京都)
6 月	審判	2010FIFA ワールドカップ南アフリカで、西村雄一主審・相楽亨副審が 7 試合担当(リザーブ含む)
9 月	審判	「2010FIFA ワールドカップ南アフリカ レフェリーワークショップ」を開催
12 月	審判	TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ UAE 2010 で決勝を西村雄一主審・相楽亨副審・名木利幸副審が担当
強化		2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
1 月	育成	(女) 「なでしこジャパン強化指定選手制度【海外】」を創設(2010 年は 5 選手を承認)
3 月	育成	「育成年代コーチ養成プロジェクト」をスタート(海外研修を実施)
3 月	育成	ナショナルトレセンコーチ研修会、年 1 回を前期・後期の年 2 回開催へ
4 月	育成	2011 年度から U-12 年代の JFA 主催試合を 8 人制以下少人数制にすることを決定
6 月	育成	スペインサッカー連盟との育成指導者養成コースを開催(育成年代指導者養成プロジェクトの一環)
6 月	育成	「育成指導者研修会」を開催(福島県)
9 月	育成	JFA 主体の「U-12 モデル地区トレセン」をスタート
		<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>
2 月	代表	日本代表、東アジアサッカー選手権 2010 決勝大会 ※3 位
2 月	代表	(女) なでしこジャパン、東アジア女子サッカー選手権 2010 決勝大会 ※優勝
5 月	代表	(女) なでしこジャパン、AFC 女子アジアカップ 中国 2010 ※3 位、世界大会出場権獲得
5 月	代表	(フ) フットサル日本代表、AFC フットサル選手権 ウズベキスタン 2010 ※3 位
6 月	代表	日本代表、2010 FIFA ワールドカップ南アフリカ ※ベスト 16
7 月	代表	(女) U-20 日本女子代表、FIFA U-20 ワールドカップ ドイツ 2010 ※グループステージ敗退
9 月	代表	(女) U-17 日本女子代表、FIFA U-17 女子ワールドカップ トリニダード・トバゴ 2010 ※準優勝
10 月	代表	U-19 日本代表、AFC U-19 選手権 中国 2010 ※準々決勝敗退、世界大会出場権を逃す
10 月～11 月	代表	U-16 日本代表、AFC U-16 選手権 ウズベキスタン 2010 ※ベスト 4、世界大会出場権獲得
11 月	代表	(女) なでしこジャパン、第 16 回アジア競技大会(2010/広州) ※優勝
		<国内リーグ関連>
4 月	リーグ	(女) プレナスチャレンジリーグがスタート
5 月	Fリーグ	(フ) Fリーグがリーグ名称を「Fリーグ powered by ウイダーinゼリー」に変更、新ロゴ発表
組織		3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
1 月	国際	スペインサッカー連盟とパートナーシップ協定を締結
2 月	社会貢献	「チャレンジ 25 キャンペーン」への協力を決定
3 月	国際	小倉純二副会長が FIFA 功労賞を受賞
4 月	施設	堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンターがオープン(同年 11 月、愛称が「J-GREEN 堺」に決定)
5 月	国際	2018/2022 年 FIFA ワールドカップ日本招致委員会、招致ブックを FIFA に提出
5 月・7 月	社会貢献	「JFA グリーンプロジェクト芝生特区・認定規定」を整備(7 月に、島根県松江市を第 1 号に認定)
6 月	国際	「FIFA 総会・招致国エキシビション」に参加
7 月	組織	小倉純二氏が第 12 代 JFA 会長に就任
11 月	国際	大島襄顧問が AFC 功労賞(30 年賞)を受賞
11 月	国際	JFA が「指導者養成における最優秀 AFC メンバー協会」として表彰(アジアコーチズイヤー2010)

※ (女) は女子サッカー、(フ) はフットサル (女子のフットサルを含む)、(ピ) はビーチサッカー関連であることを示す。

2011		
普及		
1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・		
1 月	指導者	「第 7 回フットボールカンファレンス」開催(1 月 8 日～10 日/大分)
2 月	審判	「地域育成審判インストラクター」の設置を決定(同年 3 月よりスタート)
2 月	審判	「2011 年度 JFA Media Conference on Refereeing」を開催
4 月	審判	「地域レフェリーフィットネスインストラクター」を設置
5 月	普及	FIFA グラスルーツセミナー(5 月)、FIFA グラスルーツフェスティバル(5 月)を開催
5 月・10 月	審判	審判交流プログラム(5 月～12 月/イングランド、10 月/中国)
6 月	審判	「レフェリーワークショップ」を開催
8 月	指導者 (女)	「女子: GK コーチ研修会」を初開催
10 月	指導者 (フ)	「フットサル B 級コーチ養成講習会」を創設
強化		
2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・		
1 月	国内競技会 (フ)	「全日本女子ユース(U-15)フットサル大会」を初主催
1 月	育成	「大会スケジュール改革プロジェクト(仮称)」を設置
3 月	育成	「高円宮杯 U-18」の大会方式を変更、「グループリーグ & 決勝トーナメント」を「全国リーグ & チャンピオンシップ」へ
5 月	育成	「JFA アカデミー堺」の 2012 年 4 月の開校を決定
<p><各カテゴリー日本代表の主な出場大会></p>		
1 月	代表	日本代表、AFC アジアカップ カタール 2011 ※優勝
3 月	代表 (女)	なでしこジャパン、アルガルベ女子フットボールカップ 2011 ※3 位
6 月～7 月	代表 (女)	なでしこジャパン、FIFA 女子ワールドカップ ドイツ 2011 ※初優勝
6 月～7 月	代表	U-17 日本代表、FIFA U-17 ワールドカップ メキシコ 2011 ※ベスト 8
9 月	代表 (ピ)	ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ ラベンナ/イタリア 2011 ※グループステージ敗退
10 月	代表 (女)	U-19 日本女子代表、AFC U-19 女子選手権 ベトナム 2011 ※優勝、世界大会出場権獲得
11 月	代表 (女)	U-16 日本女子代表、AFC U-16 女子選手権 中国 2011 ※優勝、世界大会出場権獲得
<p><国内リーグ関連></p>		
4 月	リーグ (女)	「一般社団法人日本女子サッカーリーグ」を設立(4 月 1 日)
組織		
3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・		
1 月	国際	田嶋幸三副会長が AFC 理事に就任
1 月	国際	小倉純二会長が「AFC 名誉メンバー」に選出
1 月	組織 (女)	「なでしこ vision」を改定
3 月	組織	「業務プラン 2013」の策定
3 月	社会貢献	「東日本大震災復興支援プロジェクト」を発足
3 月	組織	「選手ステータス協議会」の設置
3 月	社会貢献	「東北地方太平洋沖地震復興支援チャリティーマッチがんばろうニッポン！」を開催
4 月	国際	シンガポールサッカー協会とパートナーシップ協定を締結
5 月	マーケティング	アウディジャパン株式会社と日本代表チームサポーターズカンパニー契約を締結
6 月	国際	ドイツサッカー連盟とパートナーシップ協定を締結
8 月	組織 (女)	なでしこジャパンが「国民栄誉賞」を受賞
9 月	社会貢献	「リスペクト F.C.JAPAN キックオフ宣言～リスペクトを考える～」を開催
9 月	組織	日本サッカー協会、創立 90 周年記念パーティーを開催
9 月	社会貢献	「スポーツこころのプロジェクト」がスタート
10 月	社会貢献	「JFA 復興支援特任コーチ」に加藤久氏を任命
11 月	組織 (女)	なでしこジャパンが「紫綬褒章」を受章
11 月	国際	小倉純二会長が南米サッカー連盟より特別勲章を受章
12 月	国際競技会	「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ ジャパン 2011」開催(12 月 8 日～18 日/東京、神奈川、愛知) ※柏レイソルは 4 位

※ (女) は女子サッカー、(フ) はフットサル (女子のフットサルを含む)、(ピ) はビーチサッカー関連であることを示す。

2012	
普及	1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
4 月	普及 (女) 「中学校女子サッカー部フェスティバル」を初開催(大阪府、兵庫県)
4 月	普及 (女) 「中学校女子サッカー活性化プロジェクト」を立ち上げ
4 月	審判 (女) 都道府県審判トレセン(女子)を初開催
5 月	普及 FIFA グラスルーツセミナー、FIFA グラスルーツフェスティバルを開催
6 月	普及 (女) 「FIFA Live your goals ガールズフェスティバル」を開催(大阪府)
6 月	審判 「レフェリーワークショップ」を開催
8 月	審判 (フ) 「FIFA フットサルレフェリーコース」を国内初開催
強化	2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
3 月	育成 (女) 「“未来のなでしこ”セレクション」を初開催
4 月	育成 (女) 「JFA アカデミー堺」が開校
7 月～8 月	国内競技会 (女) 「平成 24 年度全国高校総合体育大会」のサッカー競技に「女子」が追加
9 月	育成 技術委員会内に、強化・育成・指導者養成の各部会を新設
10 月	国内競技会 (女) 「全日本女子サッカー選手権大会」の優勝チームに皇后杯の授与が決定
12 月	育成 「adidas all dream トレーニングキャンプ in JFA アカデミー」を開催
<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>	
2 月～3 月	代表 U-23 日本代表、男子サッカー アジア最終予選/ロンドンオリンピック予選 ※ロンドンオリンピック出場権獲得
2 月～3 月	代表 (女) なでしこジャパン、アルガルベカップ 2012 ※準優勝
5 月～6 月	代表 (フ) フットサル日本代表、AFC フットサル選手権 UAE 2012 ※優勝、世界大会出場権獲得
7 月～8 月	代表 U-23 日本代表、第 30 回オリンピック競技大会(2012/ロンドン) ※ベスト 4
7 月～8 月	代表 (女) なでしこジャパン、第 30 回オリンピック競技大会(2012/ロンドン) ※準優勝
8 月～9 月	代表 (女) U-20 日本女子代表、FIFA U-20 女子ワールドカップ ジャパン 2012 ※3 位
9 月～10 月	代表 U-16 日本代表、AFC U-16 選手権イラン 2012 ※準優勝、世界大会出場権獲得
9 月～10 月	代表 (女) U-17 日本女子代表、FIFA U-17 女子ワールドカップ アゼルバイジャン 2012 ※ベスト 8
11 月	代表 U-19 日本代表、AFC U-19 選手権 UAE 2012 ※準々決勝敗退、世界大会出場権を逃す
11 月	代表 (フ) フットサル日本代表、FIFA フットサルワールドカップ タイ 2012 ※ベスト 16
<国内リーグ関連>	
2 月	リーグ 「Jリーグクラブライセンス制度」を施行
2 月～	リーグ Jリーグが設立 20 年記念事業を展開
4 月	Fリーグ (フ) Fリーグ準会員リーグが創設
組織	3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
2 月	国際競技会 (女) 2012 年の FIFA U-20 女子ワールドカップの日本開催が決定
4 月	組織 JFA、公益財団法人へ移行(4 月 1 日)
4 月	登録 「Jエントリープロジェクト」を発足 ※KickOff のリニューアルを検討
6 月	組織 大仁邦彌氏が第 13 代 JFA 会長に就任
6 月	ミュージアム 2002FIFA ワールドカップ 10 周年記念トークショーを開催
7 月	組織 法務委員会、リスペクト・フェアプレー委員会、100 周年記念事業プロジェクトを新設
8 月～9 月	国際 (女) 「FIFA U-20 女子ワールドカップ ジャパン 2012」を開催(8 月 19 日～9 月 8 日/宮城県、埼玉県、兵庫県、広島県、東京都)
9 月	社会貢献 「リスペクト F.C.JAPAN 設立 1 周年記念シンポジウム～リスペクトを考える～」を開催
9 月	医学 スポーツ医学委員会内に「Jリーグチームドクター部会」を新設
9 月～	社会貢献 「リスペクトアワード 2012/リスペクトのある風景」を展開(2013 年 3 月に SAGAWA SHIGA FC の受賞を発表)
10 月～11 月	組織 岡野俊一郎 JFA 最高顧問が「文化功労者」に選出
12 月	国際競技会 「TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ ジャパン 2012」開催(12 月 6 日～16 日/神奈川、愛知)

※(女)は女子サッカー、(フ)はフットサル(女子のフットサルを含む)、(ピ)はビーチサッカー関連であることを示す。

2013	
普及	1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
1 月	指導者 「第 8 回フットボールカンファレンス」開催(1 月 12 日～14 日／宮城)
3 月	指導者 「サッカーの指導現場における暴力根絶に向けての指針/骨子」を承認 ※啓発活動をスタート(5 月)、相談窓口を設置(6 月)
4 月	審判 審判交流プログラム(4 月/イングランド、8 月/ポーランド、パラグアイ)
5 月	普及 AFC グラスルーツイヤー「JFA キッズサッカーフェスティバルユニクロサッカーキッズ！」を開催
6 月	サポーター 日本代表応援プロジェクト「夢を力に 2014」をスタート
6 月	普及 「普及活動担当者研修会」(Jクラブのキッズ年代の普及責任者が参加)
6 月～10 月	普及 (フ) 「JFA エンジョイ 5～JFA フットサルエンジョイ大会～」を創設
8 月	普及 (女) 「JFA・キリン レディース/ガールズサッカーフェスティバル」を新設
10 月	指導者 (ピ) 「FIFA ビーチサッカーコーチングコース」を日本で初開催(沖縄県)
11 月	普及 (女) 「JFA なでしこひろば」をスタート
強化	2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
3 月	育成 地域・都道府県トレセンコーチのライセンスを義務化 ※女子 U-15 は B 級以上、女子のみの U-12 トレセンは C 級以上
5 月	育成 (女) JFA エリートプログラム女子 U-13、初めて JFA アカデミー(福島・堺)と合同で実施
6 月	育成 「こくみん共済 U-12 サッカーリーグ」を創設
9 月	国内競技会 (フ) 「全日本ユース(U-18)フットサル大会」の新設を決定
<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>	
3 月	代表 (女) なでしこジャパン、アルガルベ女子フットボールカップ 2013 ※5 位
3 月～6 月	代表 日本代表、2014 FIFA ワールドカップブラジル アジア最終予選 ※FIFA ワールドカップ出場権獲得
7 月	代表 日本代表、EAFF 東アジアカップ 2013 決勝大会 ※初優勝
7 月	代表 (女) なでしこジャパン、EAFF 東アジアカップ 決勝大会 ※準優勝
9 月	代表 (ピ) ビーチサッカー日本代表、FIFA ビーチサッカーワールドカップ タヒチ 2013 ※ベスト 8
9 月～10 月	代表 (女) U-16 日本女子代表、AFC U-16 女子選手権 中国 2013 ※優勝、世界大会出場権獲得
10 月	代表 U-17 日本代表、FIFA ワールドカップ UAE 2013 ※ベスト 16
10 月	代表 (女) U-19 日本女子代表、AFC U-19 女子選手権 中国 2013 ※4 位、世界大会出場権を逃す
<国内リーグ関連>	
2 月	J リーグ 「2014 年シーズンからの J3 リーグの創設」が決定
2 月	J リーグ 「ACL サポートプロジェクト」を再発足
2 月	L リーグ (女) 日本女子サッカーリーグが国連 UNHCR 協会とパートナーシップ締結
4 月	F リーグ (フ) F リーグ U23 選抜を初結成(F リーグ準会員リーグに所属)
組織	3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
2 月	社会貢献 「JFA 復興支援特任コーチ」に手倉森浩氏を任命
4 月	国際 (女) 熊田喜則ミャンマー女子代表監督が ASEAN サッカー連盟「最優秀女子監督賞」を受賞
4 月	組織 小倉純二名誉会長が「旭日中紋章」を受章
4 月	組織 「業務プラン 2015」の策定
5 月	国際 「AFC 功労賞」を受賞: 浅見俊雄顧問 30 年賞、小倉純二名誉会長 20 年賞、小幡真一郎審判委員会副委員長 10 年賞
6 月	国際 タジキスタンサッカー連盟とパートナーシップ協定を締結
7 月	国際 FIFA とインターポールが「スポーツにおけるインテグリティ」ワークショップを開催
7 月	国際 ドイツサッカー連盟とパートナーシップ協定を更新
8 月～9 月	国際競技会 (フ) 「AFC フットサルクラブ選手権日本 2013」を開催(愛知県)
10 月	組織 JFA、インテグリティ協議会、インテグリティプロジェクトの設立を決定
11 月	組織 「日本サッカーを応援する自治体連盟」が発足
11 月	国際 アラブ首長国連邦サッカー協会とパートナーシップ協定を締結
11 月	組織 JFA、司法機関の独立および二審制導入を決定
11 月～12 月	ミュージアム 日本サッカーミュージアム、開館 10 周年記念トークショーを開催
12 月	国際 (女) 2023 年の「FIFA 女子ワールドカップ」開催国への立候補を決定

※ (女) は女子サッカー、(フ) はフットサル (女子のフットサルを含む)、(ピ) はビーチサッカー関連であることを示す。

2014	
普及	1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
1月～3月	指導者 (フ) 「フットサル B 級コーチ養成講習会」を初開催
1月～7月	サポーター 「夢を力に 2014」各種事業を展開
3月～5月	審判 審判交流プログラム(3月～4月/イングランド、5月/ポーランド)
4月	普及 (フ) JFA エンジョイフットサル総合サイト「j-futsal」を立ち上げ
4月	普及 (ピ) ビーチサッカー日本代表・マルセロ・メンデス監督がビーチサッカークリニックを初開催
5月	指導者 「差別、暴力に対する取り組み」を表明
5月	普及 「JFA グラスルーツ宣言」を発表(5月15日)
6月	普及 「サッカー指導の教科書」を刊行
6月	審判 2014FIFA ワールドカップブラジルで、西村雄一主審・相楽亨副審・名木利幸副審が 3 試合担当(リザーブ含む)
7月	普及 「小学校体育サポートモデル事業」を展開
8月	指導者 (フ) 「FIFA Futsal Coaching Course in Japan 2014」を開催
11月	指導者 「A 級コーチ U-15 ライセンス」新設を決定
11月	指導者 障がい者サッカーをテーマにリフレッシュ研修会を実施
強化	2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
7月	育成 「JFA フットボールフューチャープログラム/トレセン研修会 U-12」の内容を決定
7月	育成 (女) JFA アカデミー地域展開の候補地に愛媛県今治市を選定、JFA アカデミー今治の 2015 年 4 月の開校を決定
9月	育成 JFA 主催の国際ユースサッカー大会の創設を決定(第 1 回大会は 2015 年 6 月に J-GREEN 堺で開催予定)
12月	国内競技会 「JFA マッチコミッショナー制度」の見直しを決定(2016 年度から新制度)
<各カテゴリー日本代表の主な出場大会>	
1月	代表 U-21 日本代表、AFC U-22 選手権 オマーン 2013 ※ベスト 8
3月	代表 (女) なでしこジャパン、FPF アルガルベカップ 2014 ※準優勝
3月～4月	代表 (女) U-17 日本女子代表、FIFA U-17 女子ワールドカップ コスタリカ 2014 ※初優勝
5月	代表 (フ) フットサル日本代表、AFC フットサル選手権 ベトナム 2014 ※初の大会連覇
5月	代表 (女) なでしこジャパン、AFC 女子アジアカップ ベトナム 2014 ※初優勝
6月	代表 日本代表、2014FIFA ワールドカップブラジル ※グループステージ敗退
9月	代表 U-16 日本代表、AFC U-16 選手権 タイ 2014 ※準々決勝敗退、世界大会出場権を逃す
9月～10月	代表 (女) なでしこジャパン、第 17 回アジア競技大会(2014/仁川) ※準優勝
10月	代表 U-19 日本代表、AFC U-19 選手権 ミャンマー 2014 ※準々決勝敗退、世界大会出場権を逃す
<国内リーグ関連>	
1月	リーグ 「第 16 回日本フットボールリーグ」、参加チームと大会方式を変更 ※1st、2nd ステージ&チャンピオンシップ制へ
3月～12月	リーグ 「明治安田生命 J3 リーグ」が開幕
組織	3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
1月	国際 ヨルダンサッカー協会とパートナーシップ協定を締結
3月	組織 専門委員会、特別委員会の統廃合・改称(JFA リフォーム)
3月	施設 JFA ナショナルフットボールセンター(仮称)の整備を決定
3月	組織 大仁邦彌氏が第 14 代 JFA 会長に再任、馬淵明子氏が JFA 初の女性副会長に就任
4月	組織 三権分立体制を施行(JFA リフォーム)
4月	国際 田嶋幸三副会長が次回のアジア選出 FIFA 理事に立候補
4月	組織 「11 プロジェクト」を発足、2015 年度以降の新規事業についての検討を開始
5月	マーケティング キリングroupと日本代表オフィシャルパートナー契約を更新
7月	国際 ベトナムサッカー連盟とパートナーシップ協定を締結
7月	社会貢献 地球温暖化防止のための啓発活動「Fun to Share」への協力を決定
8月	国際 イランサッカー連盟とパートナーシップ協定を締結
9月	国際 フランスサッカー連盟とパートナーシップ協定を再締結
11月	マーケティング アディダス ジャパン株式会社と日本代表オフィシャルサプライヤー契約を更新
11月	施設 「JFA 施設フォーラム」を初開催(福島、鳥取)
11月	国際 日本サッカー協会、「AFC インスパイリング協会賞」を受賞

※ (女) は女子サッカー、(フ) はフットサル (女子のフットサルを含む)、(ピ) はビーチサッカー関連であることを示す。

Ⅱ. 「アクションプラン 2015」 総括

ここでは、「JFA 中期計画 2015-2022」本編の補足資料として、2005 年当時に設定した以下の「JFA アクションプラン 2015」について、その項目ごとに総括を行う。

JFA アクションプラン 2015(抜粋)

1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・
 - 1) サッカーファミリーの拡大
 - 2) 「JFA メンバーシップ制度」の充実

2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・
 - 1) 代表チームの強化
 - 2) 選手の育成
 - 3) 指導者の養成

3. 世界でトップ 10 の組織となるために・・・
 - 1) 総合力の強化
 - 2) 基盤の確立

1. サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが 500 万人になるために・・・

アクションプラン 2015 記載事項	総 括
1) サッカーファミリーの拡大	
① プレーヤー: 300 万人 (チーム/選手・キッズ・フットサル)	2015 年: 2,798,503 人
<p>常に「Players First !」の観点から、各カテゴリーに最適かつ質・量ともに充実した試合・競技会(リーグ戦等)を提供する。</p>	<p>キャプテンズ・ミッション(その後プレジデント・ミッション)の一つに掲げ、技術委員会、各種大会部会、CHQ(その後 PHQ)・技術部・競技運営部などが連携し、育成年代におけるリーグ推進を行った。導入当初は、各都道府県の種別担当者との間で大いに議論となったが、4 種・3 種・2 種のリーグは全国的に定着しつつあり、日本サッカー界に大いなる改革をもたらした。4 種年代では少人数制(8 人制)を導入したほか、複数チームの出場を促進するなど、年代に適したリーグを推進した。女子、シニア、フットサル、ビーチなどは登録人口や環境の変化に伴い、大会の改編や新設を行ってきた。</p>
<p>サッカーに触れたことのない人々に対しても、フェスティバル/イベント等を積極的に開催・提供し、サッカーの楽しさ・プレーすることの喜びを感じてもらおう。</p>	<p>一方、これまで順調に伸びていた 4 種年代の登録選手数が 2013 年度から 2014 年度の間で 1% 減少した。一部の学校現場では、子どもたちとのサッカー(スポーツ)との接点が減少している傾向も見受けられ、キッズ関連施策の継続はもちろんのこと、学校への働きかけなども今後は必要である。また、1 種年代はこの 10 年間でチーム数が大きく減少しており、対策が必要である。更には、J クラブ数の増加、ACL 大会形式の拡充、FIFA の方針などの外的要因がトップレベルの年間カレンダーが過密化しており、日本における最適なカレンダーの策定に向けて、国内競技会の抜本的な見直しを進めていく必要がある。</p>
<p>各地域においてチーム/クラブづくりを推進する。地域の拠点となる施設の確保・整備を促進するとともに、チーム/クラブの指導者のみならず、クラブ(スポーツ)マネジャーの養成に努める。</p>	<p>プレジデント・ミッションにも掲げ、キッズ、ファミリーフットサル、ガールズ・レディーズなどの各種フェスティバルを都道府県協会と共に積極的に実施してきた。また、2008 年からは、JFA フットボールデーを開始し、都道府県協会にて毎年開催し、その規模も大きくなりつつある。2013 年からは女子の普及に特化した「JFA なでしこひろば」や「FIFA グラスルーツセミナー」の展開も開始した。更には、キッズプログラムにおいて幼稚園・保育園などへの巡回指導も全ての都道府県協会で開催されており、4 種年代の選手数増加に寄与したものと考えられる。</p>
<p>プレーヤーにとって、高いモチベーションで臨める競技会・試合・フェスティバルを提供し、サッカーの喜びを味わってもらおうとともに、プレーすること以外にも JFA のメンバーであることの意義(メリット)を感じてもらえる環境を整備する。</p>	<p>一方、各種フェスティバルについては、参加者の多くが既にサッカーをしている子ども達であるケースも散見され、当初の主旨のとおり、「サッカーに触れたことのない人々」へのアプローチができるよう、実施・告知方法などについて検証していく必要がある。</p>
② 指導者: 15 万人	2015 年: 150,213 人
<p>指導者を養成する質の高いインストラクターを数多く育成し、各地域/都道府県において質・量・種類の充実した講習会を開催、多くの指導者の養成に努める。</p>	<p>チーム/クラブ推進施策については、指導者のマッチングシステムや女子チーム創設支援などのサイト運営を展開してきたが、その成果は必ずしも充分なものとは言えない。また、クラブ(スポーツ)マネジャーの養成については、JFA スポーツマネジャーズカレッジ(SMC)の 2004 年の開講以来、SMC 本講座で約 300 名、SMC サテライト講座で約 1800 名の方々を養成してきた。</p> <p>一方、4 種・3 種・2 種へと年代カテゴリーごとに途切れる日本のサッカー環境にも構造的な問題も潜んでおり、地域で多世代のチームが存在できるようなクラブ推進施策が必要である。こうしたことも含めて、JFA 全体でクラブ推進のあり方、スポーツの価値向上、クラブ文化の推進などについて検討していく必要がある。</p> <p>拠点施設の整備については、2002FIFA ワールドカップ記念事業に引き続き、都道府県フットボールセンター整備助成事業を展開し、フットボールセンター未整備は 8 県を残すのみとなっている。また、2015 年度以降の施設整備のための助成制度を 2014 年に決定し、引き続き、推進していく。</p> <p>一方、サッカー施設は絶対的に不足しており、施設整備推進は今後の大きな課題である。2014 年度に「JFA 施設フォーラム」を初開催したが、より一層の施設整備推進にあたっては、人材養成や整備・維持管理に関するノウハウの発信、また、国や地方自治体などへのより積極的な働きかけも必要である。</p>
<p>指導者の質の向上を図るとともに取り巻く環境を整備することにより、指導者の向上心を高め、ステータスの向上に努める。</p>	<p>SAMURAI BLUE やなでしこジャパンが FIFA ワールドカップに連続して出場し、世界の頂点を目指して挑戦を続け、社会の注目を集めることで、同じサッカーをする子どもたちにとって、サッカーをすることがより大きな喜びになる側面はある。そのほか、各種年代のリーグ環境の整備に努め、充実したプレー環境づくりを推進してきた。</p> <p>一方、「プレーすること以外にも JFA のメンバーであることの意義(メリット)」については、新 KICK OFF システムとして「エントリー」の導入を進めているが、2015 年現在、システムの運用開始初年度で、メンバーメリットに関する具体的な施策展開までには至らなかった。</p> <p>J3 のスタートや F リーグの発足などにより、プロのクラブ数が増えてきている中で、それらのクラブに所属する有給の指導者も増えてつつあり、その面では指導者のステータスも向上している。</p> <p>一方、アマチュアクラブや部活動の指導者を取り巻く環境が、ここ 10 年間で改善したとは言えない。今後も、指導者を取り巻く環境を整備し、指導者のステータスの向上に努めていく必要がある。</p>

JFA メンバーズサイトでのコーチ・スクエア（指導者・指導チーム検索システム）の活用やテクニカルニュースの展開等により、指導者の知識を深め、有資格者の指導機会の拡大を目指す。

隔月のテクニカルニュースの展開・その内容の充実化などにより、指導者の知識を深めてきた。一方、JFA メンバーズサイトのコーチ・スクエアでは、指導者のマッチングが一部機能してきたが、有資格者の指導機会の拡大の面では充分機能してきたとは言えず、今後は、審判なども含めた「JFA スクエア」として、新たな JFA メンバーシップ制度の検討と併せて、より積極的な施策展開が必要である。

③審判員:30万人

審判員を養成する質の高いインストラクターを数多く育成し、各地域に配置する。その上で、各地域／都道府県において質・量・種類の充実した講習会を開催し、ユース審判員から国際審判員に至るまで、多くの審判員の養成に努める。

2015年:278,028人

審判インストラクター数は2005年度が1,020人であったが、2014年度には2,798人となり、1,700人(174.3%)以上増加し、積極的に講習会を実施してきた。サッカー審判員の数は2005年度が188,582人であったが、2014年度には275,228人となり、86,000人(45.9%)以上増加した。特に、ユース審判員の登録料免除もあり、3級・4級のユース審判員は大きく伸びた。また、国際審判員の養成に関しても、レフェリーカレッジなどの取り組みを通じて、多くの1級審判員を養成し、FIFAワールドカップなど、国際大会で活躍する審判員を輩出することができた。

サッカーにおける審判員の意義・重要性をあらゆる人々に理解してもらい、審判員のステータスの向上に努めるとともに、審判員をやる喜びを提供できる環境を整備する。

しかしながら、審判員を30万人にするという目標は達成できなかった。国際審判員の若年化も進んでおり、今後、将来性のある審判員の計画的な強化体制づくりや若年層の審判員への機会増大、育成体制づくり、審判員のより一層の普及推進が求められる。

数多くの試合／競技会に対応できる様、審判員の管理・割当が効率的に行える体制を作るとともに、JFA メンバーズサイトでのレフェリー・スクエア導入の検討等、審判員が試合に参加し易い仕組みを構築する。

プロフェッショナルレフェリー(PR)制度を導入し、2009年以降には副審カテゴリーも増やし、これまで17名のPRを輩出した。また、FIFAワールドカップやFIFAクラブワールドカップで活躍する審判員を輩出し、その審判員がテレビなどのマスメディアでも取り上げられる機会も増え、社会的な認知度の向上につながった側面もある。

一方、日本のサッカー界での審判のステータスは未だ充分に高いとは言えない。今後、より一層の審判員のステータス向上、審判員としてのサッカーキャリアの構築イメージの共有など、審判員が活動しやすい環境づくりに努めていく必要がある。

④運営スタッフ・協会役員:5万人

日本サッカーのために運営面で貢献するという参画意識やステータスを高める魅力ある競技会を開催する。

2015年:54,753人

FIFAクラブワールドカップをはじめ、SAMURAI BLUEの国際親善試合など、社会的にも注目を集める競技会を数多く開催することができ、運営に携わる人々の参画意識やステータスの向上に寄与できた。また、2007年度よりJFAマッチコミッショナー制度を導入し、主なJFA主催大会へのマッチコミッショナーの派遣を行い、安全で質の高い大会運営を実施するための役員を配置してきた。

ボランティアや地域貢献の精神を醸成し、関係者の交流が活発に行われる仕組みを構築する。

プレジデント・ミッションの関連施策において、キッズ関連活動やエリート養成、各種フェスティバル、リーグ推進などの担当者による各種ジョイントミーティングを各地で開催してきた。全国レベルのジョイントミーティングから、地域単位でのジョイントミーティングなど、様々なかたちで開催し、専門分野の情報交換だけでなく、関係者間での活動に関わるモチベーションの高揚など、多くの効果があった。特に、サッカーの普及に関わる活動については、単に仕事として推進するのではなく、関わる担当者のボランティア・地域貢献の精神があって成り立つものであるため、こうした会議の開催は有意義で、今後も引き続き、開催する価値がある。

一方、関係者の交流が活発に行われるような仕組みとしてのボランティアの組織化までには至っておらず、今後、新たなJFAメンバーシップ制度のあり方と共に、検討・推進していく必要がある。

⑤ファン:150万人

JFA主催試合のチケット購入に関する一定の権利提供・JFA関連セレモニー／日本代表関連行事への参加・情報提供等を検討し、サッカーを楽しむ人々にメリットを提供する。

2015年:1,980,723人

2008年よりチケットJFAサイトをオープンし、JFAならではのチケット商品を日本代表戦や天皇杯などで取り扱い、顧客満足度の向上を図ってきた。チケットJFA登録者は、導入年度の2008年度に58,099人だったのが、2015年3月には504,849人となり、8.6倍以上の伸びとなった。チケットJFA登録者に対しては、メルマガなどを通じて大会や試合などの最新情報を提供してきた。

強い日本代表チームであり続け、常にハイレベルな試合が展開されることが最も重要であることを認識し、スタジアムへのアクセスや快適性も追求し、観る人にとって魅力のある試合内容や総合的なエンターテインメントを提供する。

一方、サポーターやファンも入会できるような緩やかな会員制度の構築までには至らず、こうした顧客層への積極的な施策は展開できなかった。今後、JFAメンバーシップ制度のあり方を検討し、具体的な施策につなげていく必要がある。

ファン・サポーターに対する様々な企画を検討し、日本代表・JFAを支援するという参画意識やステータスを高めるとともに日本サ

SAMURAI BLUEの国際親善試合は、一時的に低迷した時期もあったが、近年ではチケット売上が続く状況にある。その中で、スタジアムでは、顧客満足度調査なども実施し、来場してくれたサポーターへのファンサービスの向上に努めてきたほか、場内イベント・サービスの充実、ホスピタリティの向上、代表戦独自の空間演出などにも努めてきた。

一方、スタジアムそのもののハード要件に縛られ、アクセスや快適性などでの改善には限界があり、今後は、より魅力的なサッカースタジアムの整備を、都道府県協会やリーグと共に、地方自治体などへ積極的に働きかけていく必要がある。

FIFAワールドカップでのSAMURAI BLUEの活躍を応援するために「Go for 2006」、「All for 2010」、「夢を力に2014」などのキャンペーンを展開し、広くファン・サポーターの盛り上がり一体感を醸成してきた。2014年度には、「夢を力に2014」の一環で、代々木体育館での日本代表の壮行会を開

サッカーを応援する喜びを持ってもらう。

「リーグ」クラブと連携を図り、各「クラブ」のサポーター（ファン）クラブの会員とも直接リンクできる仕組みの構築を目指す。

催し、FIFA ワールドカップに向けた SAMURAI BLUE の応援の機運醸成にも努めてきた。そのほか、2013 年には、全国の市長有志の集まりである「日本サッカーを応援する自治体連盟」が発足した。

「リーグ」クラブとの連携による各「クラブ」のサポーター（ファン）クラブの会員と直接リンクできる仕組みの構築については、検討を行ってきたが、実現には至らなかった。今後、新たな JFA メンバーシップ制度の検討にあたり、「クラブサポーターとのつながりの創出は重要な課題の一つである。

2) 「JFA メンバーシップ制度」の充実

①より多くのメリットの提供

全てのサッカーファミリーにサッカーを「する・見る・支える・語る」喜びを提供する。

良質なサッカー関連情報を提供し、メンバー間の情報共有・交流が活発に行われる仕組みを構築する。

選手・指導者・審判の各登録者・有資格者に対しては、競技会や各種講習会・研修会の充実、機関紙を通じた情報の提供など、様々なサービスを提供してきた。また、2014 年には既存の登録者だけでなく、より多くの人々にサッカーの喜びを提供していくべく、「JFA グラスルーツ宣言」を行った。

一方、登録者だけにとどまらない新たなメンバーシップ制度の確立には至っておらず、そうしたサッカーファミリーへの具体的な施策展開には至っていない。

登録チームに発行する JFAnews や、指導者に発行するテクニカルニュース、そのほかメーリングリストなどが機能し、良質なサッカー関連情報を提供してきた。また、JFA 公式 WEB サイトについても、携帯・スマートフォン対応、SNS の活用など、時代に併せてリニューアルをし、魅力的なコンテンツ発信に努めてきた。

一方、メンバー間での情報共有・交流が行える仕組みは構築できておらず、今後、新たなメンバーシップ制度の中で検討していく必要がある。

②制度の確立

全てのサッカーファミリーにとって参画しやすく、都道府県協会/JFA にとって管理しやすい仕組みを構築し、サッカーファミリーと都道府県協会・JFA が直接リンクする形を目指す。

JFA メンバーズサイトを有効に活用し、各カテゴリーの特性に応じた魅力的な「JFA メンバーシップ制度」を構築する。

2012 年度より「J エントリープロジェクト」を立ち上げ、Kickoff システムを中心とした 130 万人を超える登録者の管理・運用システムの改善に努めてきた。

一方、「J エントリー」については、その導入時期に、開発の遅れなどがあり、都道府県協会の関係者に一部混乱も生じさせてしまった。また、選手や指導者、審判の登録者だけでなく、運営スタッフやボランティア、サポーター、ファンなども含めた広くサッカーファミリーと直接リンクする仕組みは構築することはできなかった。

新たな JFA メンバーシップ制度は確立することができなかった。今後は、2019 年度に新たな JFA メンバーシップ制度を導入することを目指し、現行の登録の仕組みや、未登録のチーム/選手が存在する市区郡町村協会および各種連盟のあり方、メンバーへのサービスのあり方なども含めて整理・検討し、制度設計をする必要がある。

2. 日本代表チームが世界でトップ 10 のチームとなるために・・・

アクションプラン 2015 記載事項	総括
1) 代表チームの強化	
①クラブとの連携強化と国内リーグの世界レベルへの発展	
クラブとの連携を強化し、各クラブがアジア・世界の大会で活躍できる環境を整備する。そして、選手強化の根本をなす国内最高リーグである Jリーグと Lリーグ（なでしこリーグ）を世界レベルへ発展させ、常日頃の試合を通じ、選手の能力を高める。	クラブがアジアや世界の大会で活躍できる環境の整備については、JFA での ACL サポートなどの取り組みや Jリーグ将来構想委員会などでの検討などを通じて行ってきた。ACL では、2007 年に浦和レッズが、2008 年にガンバ大阪がそれぞれ優勝した。 一方、Jリーグと Lリーグについては、まだ世界レベルとは言えない。特に、近年、Jリーグの観客数が伸び悩んでおり、地上波放送でも苦戦を強いられている。今後は、国内トップリーグの世界レベルへの発展に向けて、より一層、連携を強めて行く必要がある。2015 年度からは、日本サッカーの強化・育成を目的に、Jリーグとの連携による JFA/Jリーグ協働プログラム（育成プログラム）を展開していく方針を決定しており、そのほか、トップリーグカレンダーの策定や都道府県協会とクラブの連携推進などを行っていく。
世界トップクラスの海外リーグに優れた日本人プレーヤーを数多く輩出し、国際経験を与える。	現在、SAMURAI BLUE の多くの選手が海外でプレーする選手となっている。また、FIFA ワールドカップに連続して出場でき、そこでの活躍により、日本人選手が海外で評価されるようになった。 一方、海外で活躍する選手も、海外トップリーグの中で常にレギュラーで活躍できる選手は少なく、日本人選手の育成年代からのより一層の強化は重要な課題である。同時に、海外リーグへの代表選手の輩出は、Jリーグのトップ選手の空洞化にも繋がる可能性があり、国内トップリーグの価値向上も重要な施策である。
②チーム/選手環境の向上	
男女各年代の日本代表チームが国内・国外で、充実した国際試合/キャンプを行える様、スケジュール調整やマッチメイク等を実施する。	FIFA が定める IMD（インターナショナルマッチデー）と各種大会、国内リーグとの調整など、男女各年代の日本代表チームが国内外で充実した国際試合/キャンプを行えるよう、スケジュール調整やマッチメイクを実施してきた。 一方、UEFA の動向など、国際サッカー環境は時に大きく変化することが予想されるため、今後も、男女各年代の日本代表チームが国内外で充実した国際試合/キャンプを行えるよう、関係団

選手選出に関し、所属チームが選手をリリースし易い仕組みを構築し、また、それぞれの代表選手のモチベーション高揚に繋がる環境を提供する。

常にハイレベルな競技運営を行い、チーム／選手により良いプレー環境を提供する。

③最適なチームスタッフの編成

日本サッカーの目指す方向性に合致したより良いコーチングスタッフを選任・編成し、可能な限りのサポートを行う。

男女各年代の日本代表チームのサポート体制を充実させ、テクニカル・メディカル／栄養・総務・広報・エクイップメント等、現場のニーズに合った体制を構築する。

体と連携の上で、スケジュール調整、戦略的なマッチメイクを推進していく必要がある。

SAMURAI BLUE の代表選手の選出にあたっては、カレンダーの調整の上で、クラブペイメントや保険などの最適化を図ることで対応してきた。同時に、SAMURAI BLUE は FIFA ワールドカップに連続出場し、国内外での価値も向上してきているため、選手個人にとって、代表選出は海外有名クラブへのアピールの機会にもなり、モチベーションは決して低い状況にはない。

一方、女子やユース年代の代表については、国内リーグとのカレンダー調整がつかない場合もあり、所属チームにとって選手をリリースしにくい状況が発生しており、対策が必要である。

代表人気により、ここ数年の代表戦は満員になり、選手のモチベーションを高めている要素はある。また、ハイレベルな競技運営ができており、チーム／選手にとって良いプレー環境を提供できている。

一方、さらなるプレー環境の改善に向けて、今後は Jリーグとも協力しながら、サッカースタジアムの整備推進に力を入れていく必要がある。また、代表チームの活動拠点が存在せず、より良いプレー環境を提供していく意味でも、拠点施設の首都圏での整備が必要である。2018 年に向けて、「JFA ナショナルフットボールセンター(仮称)」の整備を進めていく。

技術委員会やコーチングスタッフを中心に、日本サッカーの目指す方向性に基づき、その時点での最適なコーチングスタッフの選任・編成を行い、サポートも実施してきた。

一方、2005 年にハビエル・アギーレ監督との契約を解除せざるをえない状況になり、急遽、ヴァイッド・ハリルホジッチ監督を選任するに至った。監督の選任には、様々な観点を考慮し、慎重な人選が必要である。

技術委員会やコーチングスタッフ・事務局が一体となって、選手との信頼関係の構築、コミュニケーション機会の確保などを通じた選手サポートを充実させてきたとともに、コーチングスタッフやテクニカルスタッフ、メディカルスタッフなどのサポート体制づくりを行ってきた。

2) 選手の育成

①指導体制の充実とユース育成／エリート養成システムの確立

常に世界の動向を見ながら、各年代に応じた指導指針を充実させていくとともに、一貫指導体制／方針を整備し、国内へ浸透させる。

キッズ年代から代表に至るまで、各年代に合ったエリート教育のプログラムを策定するとともに、メディカルサポート体制を充実させ、日本代表の強化に直結した日本独自の一貫したユース育成／エリート養成システムを確立する。

一貫指導体制／方針の整備に関しては、日本型の育成システムの構築に向けて、2006 年度には地域/都道府県トレセンコーチのライセンスを義務化し、2008 年には、『JFA2005 年宣言』実現に向けたロードマップ』を策定し、リーグ環境の整備のほか、各種トレセンの開設・発展などを通じて、男女の地区・県・地域・ナショナルのトレセンの充実にも努めてきた。2 年に一度のフットボールカンファレンスでは、世界レベルの育成のあり方についての協議を重ね、それらを各地のトレセンの現場に反映させてきた。

一方、地区・都道府県・地域・ナショナルの各トレセンについては、地区レベルでの開催頻度や指導者の質が安定していない面もある。今後、日本全体のトレセンの仕組みについて、その成果検証とあり方を検討し、より良いトレセンの仕組みを整備していく必要がある。

キッズ年代エリートプログラム、トレセン制度などを通して、優れた個の発掘とエリート養成を行ってきた。JFA アカデミーを創設し、JFA 自らが世界基準となる個の育成をロジック形式で導入した。現在福島、宇城、堺、今治と拠点を広げており、選手育成のみならず、アカデミーそのものがエリート養成モデルの情報発信基地としての機能を有してきた。

一方、日本代表が FIFA ワールドカップで好成績を残せなかったことを受け、日本代表のピッチ上の課題も明らかになってきている。今後、技術委員会がまとめた「2015 日本代表 強化指針」を代表だけにとどまらず、育成の現場に徹底していく必要がある。また、エリート養成機関の JFA アカデミーについては、特に男子のアカデミーについて、その成果検証を行うべき時期に来ている。更には、日本のサッカー界の現状において、19 歳から 22 歳までの選手の試合環境が不足しており、この年代における質の高いプレー環境の整備が重要な課題である。

②競技会と育成環境の充実

常に選手育成の観点に立ち、各年代に適した試合・大会(リーグ戦等)のあり方を提示するとともに、充実した競技会を提供する。

日常生活や勉強への配慮や施設／用具の整備も含め、選手にとってより良いトレーニング環境を考え、選手育成のサポートや啓発を行う。

『JFA2005 年宣言』実現に向けたロードマップ』に基づき、育成年代においては、4 種は少人数制による地区単位でのリーグ戦の導入を進め、2・3 種においては年間を通したリーグ戦の整備を目指し、施策を進めてきた。これらプレーヤーズファーストの観点の施策を通じて、より多くの選手が公式戦に出場する機会を得ることができ、選手の日常が変わりつつある。

一方、リーグ環境は既存の冠大会などが整理できていない地域などでは日程が過密となっており、各地域でのサッカーカレンダーの整理は引き続き必要である。また、2・3 種年代については、部活動顧問の負担も大きく、対策が求められる。

日本の育成年代のサッカー環境は、クラブチームも増えつつあるが、部活動によるところが大きい。こうした中で、「中学生年代の環境充実」をキャプテンズ・ミッション(その後プレジデント・ミッション)の一つに掲げ、この年代の多様なプレー機会の創出に努めてきた。また、「めざせ！ベストサポーター」リーフレットの展開などを通じて、より良い選手の育成環境の実現に向けた啓発活動を行ってきた。

一方、中学・高校の部活動サッカー部の多くでは、受験などを控え、部活と勉学の両立の難しさから、3年生の早い時期に引退せざるをえない状況が依然として少なくない。この時期の選手にとっては、部活動以外で活動を続けられる環境が極めて少ないため、今後も、多様なかたちで選手として継続できるような仕組みやクラブなどの受け皿づくりが必要である。また、施設や用具の整備に関しても、都道府県フットボールセンターなどの拠点施設の整備や一部の私立高校などでの人工芝化が進んだものの、選手の環境は大きく改善したとは言えない状況にあり、引き続き、対策が必要である。

3) 指導者の養成

①世界レベルの指導者の養成

常に世界基準を意識しながら、指導者の質の向上に努め、代表チームを率いることのできる世界レベルの指導者を数多く養成する。

S級の指導者は、2005年度は210名だったが、2014年度には411名となり(95.7%増)、トップレベルの指導者は確実に増えつつある。また、2008年から2010年にかけては、SAMURAI BLUEの監督を岡田武史氏が務め、FIFAワールドカップに出場し、ベスト16入りを果たした。また、アジア各地でもクラブの監督経験者が指導者・監督として活躍している。

一方、ヨーロッパの強豪クラブでの日本人監督はおらず、いまだ発展途上にある。代表チームを率いることができるような世界レベルの指導者の養成に向けて、将来性のある指導者の海外派遣や、海外からの指導者の招へいなど、より積極的な施策推進が求められる。

②ユース育成／エリート養成に関わる指導者の充実

ユース育成／エリート養成において、常に世界基準で選手育成ができる指導者を質・量ともに充実させ、指導者の管理や人材の有効活用を行う。

ユース育成／エリート養成に関わる指導者の充実に関しては、2007年には地域スースダイレクター、47FAユースダイレクターを設置したほか、「公認A級コーチU-12養成講習会」を新設するなど、指導者養成を通じたより高いレベルの育成に取り組んできた。また、ユース育成／エリート養成を主管する技術委員会についても、2009年には技術委員長を強化と育成の2名体制にするなど、JFA内での体制整備にも努めてきた。2010年には海外研修も含む「育成年代コーチ養成プロジェクト」を立ち上げ、2年に一度のフットボールカンファレンスでは海外の指導者を招き、各種講習会でも世界でトップレベルの指導のあり方を多くの指導者と共有した。

一方、日本サッカーは、強化面では未だ発展途上である。日本代表が世界のトップクラスになるためには、代表の強化だけでなく、将来の代表選手を育む子どもたちの日常を支える指導者のより一層の質の向上が必要不可欠である。技術委員会が整理した「日本代表 ピッチ上の課題」や「2015 日本代表 強化指針」を全国の指導者と共有し、日本サッカーの課題の解決に共に取り組んでいかなければならない。

3. 世界でトップ10の組織となるために・・・

アクションプラン 2015 記載事項	総括
1) 総合力の強化	
①国際力の強化	
<p>FIFA/AFC等に様々な役職の人材を輩出し、国際サッカーに貢献するとともに、国際交渉力・発言力を高める。また、国際的な指導者を数多く養成し、定常的に海外に指導者を派遣する。</p> <p>海外FAの研究や世界の情報収集・分析を行い、JFAの事業計画・日本代表チームの強化計画を見据えた国際戦略を立案・展開する。</p>	<p>小倉名誉会長に続き、2015年5月に田嶋副会長が新たにFIFA理事となることが決定した。過去10年間、AFCには理事そして各種委員会の委員を輩出している。また、アジア貢献事業の一環として海外指導者派遣を積極的に実施し、その派遣対象国は多岐に広がっており、アジア内でも存在感を発揮し、今後も益々ニーズが増えていくと思われる。</p> <p>一方、未だ日本のサッカー界の国際的な発言力は十分に高まっておらず、より積極的な国際交流、ネットワークづくり、国際大会などを通じた信頼関係の構築などに努めていく必要がある。</p>
<p>過去10年間で、ドイツやスペインなど多くの海外の協会(連盟)とパートナーシップ協定を締結してきたほか、委員や事務局レベルでも、FIFAやUEFA、AFC、海外の協会などに出向や研修などで交流を持つことができた。近年では、中期的な国際戦略を立案し、国際力の強化に向けた取り組みに着手している。</p> <p>一方、国際力については、海外の協会と比較して、決して高い状況にはない。今後、策定した国際戦略に基づき、より一層の国際力の強化に向けた取り組みが必要である。</p>	<p>過去10年間で、ドイツやスペインなど多くの海外の協会(連盟)とパートナーシップ協定を締結してきたほか、委員や事務局レベルでも、FIFAやUEFA、AFC、海外の協会などに出向や研修などで交流を持つことができた。近年では、中期的な国際戦略を立案し、国際力の強化に向けた取り組みに着手している。</p> <p>一方、国際力については、海外の協会と比較して、決して高い状況にはない。今後、策定した国際戦略に基づき、より一層の国際力の強化に向けた取り組みが必要である。</p>
②情報の活用	
<p>あらゆる情報を収集・分析・発信し、様々なメディアを活用しながら日本サッカーの取り組みを広く国内外に広報(PR)する。</p> <p>日本サッカーの情報発信基地として、サッカー関係者にとって魅力ある「日本サッカーミュージアム」を創り上げる。</p>	<p>JFAnewsやテクニカルニュースなどの自社メディア(印刷物)を通じて、多くのサッカーファミリーに情報を発信してきた。公式WEBサイトに関しては、時代に併せてサイトリニューアルを実施するほか、携帯・スマートフォン対応やSNSの活用など、新たなメディアにも対応しながら、広く国内外への情報発信に努めてきた。公式WEBサイトには、ワールドカップ開催時に記録的なアクセスを実現している。</p> <p>一方、JFAの取り組みの海外への情報発信については、2015年度にようやく着手はできたものの、今後も、引き続き推進していく必要がある。また、国内についても、個別のマーケット分析に基づき、メディアリレーションの強化は勿論のこと、広告媒体の購入なども視野に入れて、より積極的な広報(PR)を推進していく必要がある。</p>
<p>日本サッカーミュージアムは、2014年に来館50万人を超えた。多くの人に利用してもらっているほか、各種研修・イベントなどでのヴァーチャルスタジアムの活用も行ってきた。</p> <p>一方、サッカーミュージアムについては、JFAとしての利活用のあり方について、再度、検討が必要である。</p>	<p>日本サッカーミュージアムは、2014年に来館50万人を超えた。多くの人に利用してもらっているほか、各種研修・イベントなどでのヴァーチャルスタジアムの活用も行ってきた。</p> <p>一方、サッカーミュージアムについては、JFAとしての利活用のあり方について、再度、検討が必要である。</p>

要である。

③マーケティングの効果的な実施

日本代表チームを最大限活用するとともに、JFA ブランドを確立し、より効果的なマーケティングを行う。

日本代表ブランドを軸として、マーケティングの専門部署を立ち上げ、ステークホルダーにとって、より機動的で実効性のある対応ができるようになった。2015 年度からの新たなスポンサー契約を発展的なかたちで結ぶことができたほか、グラスルーツの育成部分の新たなパッケージでのセールスにも成功しており、継続して取り組んでいく。

一方、JFA 全体のブランド力の強化は今後も必須で、各種大会や活動などの表記や VI(ヴィジュアル・アイデンティティ)の統一など、継続して取り組むべき課題は多い。また、JFA 全体の事業構造を見ると、代表ブランドへの依存が高く、代表以外の JFA 事業の価値を向上させていく必要がある。

④管理体制の充実

情報の活用に際し、組織内外に先進的な情報管理システム(IT)を構築する。

JFA 内に情報システム室を発足させ、PC 環境やモバイル機器の導入など、時代の潮流に合わせて、必要な情報管理システムを導入してきた。

一方、海外の協会と比較して、日本のサッカー界の IT レベルは決して高いとは言えない。引き続き、地域/都道府県協会も含め、競技会や講習会などのあらゆるサッカーシーンにおいて、より一層の IT 推進が必要である。

JFA のステークホルダー(関係者)や組織外の団体とより良い関係を構築し、積極的な働きかけを行う。

2013 年に市長有志からなる「日本サッカーを応援する自治体連盟」が発足した。

一方、ステークホルダー(関係者)や組織外の団体への積極的な働きかけはこれまで充分に行えてきたとは言いがたい。日本のサッカー界を新たなステージに発展させていくためには、より多くのステークホルダーと良好な関係を構築し、共に日本のサッカー界の発展に向けて取り組んでいく必要がある。国や地方自治体、そのほか、関係団体へのより働きかけ、社会への積極的な関わりの創出が必要である。

直面するあらゆる問題に対し、法的に正しく対処できる体制を構築する。

管理部門のなかに法務専門グループを発足させ、顧問弁護士の専任化(非常勤)により、法的に正しく対処できる体制を整えた。

一方、現在の仕組みでは、これら法的対処に関するノウハウの組織への蓄積がなされないため、今後は、事務局組織として一定の対応ができるような体制を整えた上で、顧問弁護士に相談できるような体制をつくっていく必要がある。

⑤プレジデント・ミッションの遂行

2 年間の重点施策としてプレジデント・ミッションを遂行し、地域/都道府県協会と一体となり、日本サッカーの大改革を推進する。

「JFA2005 年宣言」以降、都道府県協会の多くの関係者の理解・協力により、キャプテンズ・ミッション(その後プレジデント・ミッション)を通じて、日本サッカーの大きな改革を行ってきた。

M1:「JFA メンバーシップ制度」の推進

登録者以外のサッカーファミリーも含めたメンバーシップ制度は確立できず、改題が残った。一方、サッカーファミリーの拡大に取り組み、サッカーファミリーが 500 万人を越えるに至った。

M2:「JFA グリーンプロジェクト」の推進

都道府県フットボールセンターの整備推進事業を柱に拠点施設の整備に努めてきたほか、ポット苗方式芝生化モデル事業を通じて、園庭や校庭の芝生化も積極的に展開してきた。

M3:「JFA キッズプログラム」の推進

幼稚園や保育園への巡回指導などを通じて、心身、特に神経系の発育発達がめざましい幼児期や小学校低学年の子どもたちに、身体を動かすことの爽快さやスポーツの素晴らしさを伝えてきた。

M4: 中学生年代の環境充実

都道府県協会と協働し、4 種の受け皿であり、2 種への貴重な準備期間である中学生年代の選手に対する「プレー機会の増加」と「環境の整備」に関して、地域の特性も活かしながら、様々な活動に取り組んできた。

M5: エリート養成システムの確立

強化に重点を置いた取り組みとして、キッズ(U-10・U-8・U-6)年代から各種トレセン、JFA アカデミーとの連携も含め、日本代表の強化にも直結した日本独自の一貫したエリート養成システムを確立すべく、様々な活動を行ってきた。

M6: 女子サッカーの活動推進

女子の競技人口の拡大を目指し、キッズ・ガールズ・レディースの各年代の女性を対象に様々な活動を展開してきた。2011 年のなでしこジャパンの FIFA ワールドカップの優勝もあり、この 10 年間で女子サッカーの社会的な認知度は大いに高まった。

M7: フットサルの普及推進

未経験者から愛好者まで、レクリエーション志向から競技志向まで、広く人々がフットサルをプレーする機会・楽しむ機会を得られるよう、あらゆる働きかけを行ってきた。2007 年に F リーグも開幕し、フットサルの社会的な認知度も大いに高まった。

M8: リーグ戦の推進と競技会整備・充実

選手がそれぞれの年代・レベル別に応じた環境で、年間を通じてプレー機会が提供されるよう、リーグ推進を行ってきた。日本サッカー界にとって、非常に大きな改革であったが、都道府県協会の多くの関係者の理解・協力により、4 種・3 種・2 種のそれぞれの年代でリーグが定着しつつある。

M9: 地域／都道府県協会の活動推進

協会組織の基盤強化から、市区郡町村協会の組織機構への位置づけや未登録の登録推進、シニアの活性化など、様々な課題に取り組んできた。2008 年には全都道府県協会が法人化した。

M10: 中期展望に立った方針策定と提言

「JFA2005 年宣言」で掲げた「DREAM／夢があるから強くなる」のスローガンを掲げ、都道府県協会と共に、あらゆる日本サッカー界の課題解決に取り組んできた。JFA 内では、「アクションプラン 2015」に基づき、具体的な業務計画としての「業務プラン」を策定・改訂しながら、JFA の諸施策を実行・管理してきた。今回、新たに「JFA 中期計画 2015-2022」を策定した。

M11: スポーツマネジメントの強化

JFA スポーツマネジャーズカレッジ(SMC)を通じて、協会組織やクラブのマネジャー養成に務め、日本のスポーツ界におけるマネジメントの強化に努めてきた。

上記 11 のミッションの活動を通じて、それぞれ大きな成果を生んできた。一方、各ミッションの内容については、これからも継続は必要で、重要な課題も残っている。今後、JFA は新たに設定した「JFA ミッション 2015-2022」に基づき、上記プレジデント・ミッションの活動も継承し、日本サッカーの発展に向けて取り組んでいく。

2) 基盤の確立

①組織・人材の充実

都道府県協会(支部／区郡市協会)の機構改革を行うとともに、理事会・委員会・事務局および各種連盟等、JFA の組織を充実させる。

組織内外に有能な人材を数多く確保し、人材の計画的な採用・育成および適切な配置を行い、人的資源の有効活用を図る。

2008 年に都道府県協会の全てが法人化した。常勤事務局体制も整い、2005 年当時と比較し、協会の基盤は大いに強固なものとなった。

一方、都道府県協会と支部・地区／市区郡町村協会のあり方については、都道府県協会の組織機構への位置づけ、未登録の登録推進、各種連盟の整理など、多くの未解決の課題もある。今後、新たな JFA メンバースHIP 制度の導入に向けて、引き続き、検討が必要である。

JFA 組織に関しては、2012 年に公益財団法人に移行したほか、FIFA 標準規約対応や近年では JFA リフォームにも着手し、基盤強化に努めている。

一方、社会的な責任も担う JFA としては、今後も、コンプライアンスやリスクマネジメントなどのガバナンスの強化、渉外活動・事業評価・事業進捗管理なども含めた企画調整機能の強化が求められる。

協会組織は、2005 年度から 2014 年度までで職員数が大きく増加した。同時に、各種職員研修や海外への職員の出向・研修なども推進しながら、人材の育成に取り組んできた。2005 年 3 月には大切にしていけるべき価値観として「JFA バリュー」を策定した。

今後も、組織内外に有能な人材を数多く確保し、人材の計画的な採用・育成および適切な配置を推進し、人的資源の有効活用を図っていく必要がある。また、「JFA バリュー」を徹底するためにも、今後は、JFA の役職員のあるべき人材像を共有しながら、行動指針としての「JFA のウェイ」を策定していく。

②施設の確保・増加

プレーヤー・運営者・競技会等のために、様々な働きかけを行い、全国により多くの利用可能施設を確保するとともに、より良質な施設の増加を目指す。

J-STEP、J-Village に続く 3 番目のナショナルトレーニングセンターとして、J-Green 塚の設立に深く関わった。J-Green 塚は、西日本エリアにおける一大拠点として機能している。また、施設整備推進については、2002FIFA ワールドカップ記念事業に引き続き、都道府県フットボールセンター整備助成事業を展開し、フットボールセンターの未整備は 8 県を残すのみとなっている。また、2015 年度以降の拠点施設整備のための助成制度を 2014 年に決定し、引き続き、推進していく。

一方、サッカー施設は絶対的に不足しており、施設整備推進は今後の大きな課題である。2014 年度に「JFA 施設フォーラム」を初開催したが、より一層の施設整備推進にあたっては、人材養成や整備・維持管理に関するノウハウの発信、また、国や地方自治体などへのより積極的な働きかけも必要である。

同時に、代表チームの活動拠点がなくことから、首都圏に「JFA ナショナルフットボールセンター(仮称)」の整備を進める。

③財務基盤の確立

日本サッカーの方向性に沿った投資対効果を常に念頭に置き、収入の増加と支出の削減に努め、より強固な財務基盤を確立する。

2005 年以降、JFA の事業規模は拡大し、将来の普及・強化・基盤整備のための積立でも行ってきた。また、2015 年度からの 8 年間の新たな日本代表オフィシャルパートナー・オフィシャルサプライヤー・サポーティングカンパニーが決定し、中期的な収入確保の見通しがついた。同時に、中期計画を策定する中で、特定年度での支出も含めた 8 年間の収支計画を策定した。

一方、新たな目標で掲げた「世界でトップ 3 の組織になる」ためには、財務基盤のより一層の強化が求められる。JFA の事業評価も行いながら、限られた財源の中で、より投資効果の大きい事業ができるような体制づくりも必要である。

Ⅲ. サッカーファミリー調査

ここでは、「JFA 中期計画 2015-2022」の補足資料として、サッカーファミリー数の総括を実施した部分について、特に、未登録選手などの把握のための「全国サッカーファミリー調査」の調査結果について、より詳細なデータを整理する。

また、「JFA 中期計画 2015-2022」で記載した 2005 年度から 2014 年度までの登録者数(選手/チーム、指導者、審判員)について、その推移をグラフ化したものを、参考までに記載した。

本データ集では、中期計画においてサッカーファミリー数として総括した下表のうち、網掛け部分に関する3つの調査結果について、補足データとして取りまとめた。

[2015年サッカーファミリー数]

項目		人数(人)	区分計	備考
■プレーヤー(目標値: 3,000,000)				
1	登録者	サッカー	964,328	2014年度
2		フットサル	44,057	2014年度
3		J-futsal	21,114	2015年3月末
4	未登録者	登録チーム内未登録選手	331,918	サッカーファミリー調査より
5		市区町村未登録	247,740	サッカーファミリー調査より
6		フットサル(エンジョイ志向)	748,311	サッカーファミリー調査より
7	JFA主催	フットボールデー	22,264	2014年度
8	イベント	各種フェスティバル	102,539	2014年度
9	参加者	キッズプログラム	221,392	2014年度推計値
10		JFA・キリスマイルフィールド*	94,840	2011年度からの実績
			2,798,503	
■指導者(目標値: 150,000)				
11	登録者	登録者	76,536	2014年度
12		キッズリーダー-任意登録者	972	2014年度
13		監督数	12,411	2014年度
14	未登録	キッズリーダー-(受講者数)	9,056	2013年度からの実績
15		コーチングスタッフ	51,238	サッカーファミリー調査より
			150,213	
■審判(目標値: 300,000)				
16	登録者	サッカー	250,902	2014年度
17		フットサル	24,326	2014年度
18		サッカーインストラクター	2,324	2014年度
19		フットサルインストラクター	476	2014年度
			278,028	
■運営スタッフ(目標値: 50,000)				
20	協会役職員	日本協会	182	2015年3月末
21		地域/都道府県協会	1,847	2015年2月
22		地区/市区町村協会	13,058	サッカーファミリー調査より
23	クラブスタッフ	J/JFL/なでしこ/Fリーグ	4,456	2015年2月
24	ボランティア	J/JFL/なでしこ/Fリーグ	14,553	2015年2月
25		都道府県協会	2,721	2015年2月
26		登録チームスタッフ	15,755	サッカーファミリー調査より
27	SMC修了生		2,181	2015年3月末
			54,753	
■サポーター(目標値: 1,500,000)				
28	チケットJFA会員		504,849	2015年3月末
29	日本サッカー後援会		6,310	2014年度
30	クラブサポーター	J/JFL/なでしこ/Fリーグ	690,452	2015年2月
31	登録チーム	18歳以下選手サポーター	779,112	2014年度
			1,980,723	
合計			5,262,220	

- 1. サッカーファミリー調査(4種・3種・2種)
- 2. サッカーファミリー調査(市区郡町村協会)
- 3. サッカーファミリー調査(フットサル施設)

- 1. サッカーファミリー調査(4種・3種・2種)

- 2. サッカーファミリー調査(市区郡町村協会)

- 3. サッカーファミリー調査(4・3種・2種)

[その他の参考数値]

項目		人数(人)	区分計	備考
1	JFAこころのプロジェクト「夢の教室」参加児童	211,951		2007年度からの実績
2	リスペクトFC加盟者	7,905	219,856	2015年3月末

1. サッカーファミリー調査(4種・3種・2種)

[調査概要]

2013年から2015年にかけて2度にわたり実施した「JFA 全国サッカーファミリー調査」のひとつで、調査対象は、JFAに登録する4種(小学校年代)、3種(中学校年代)、2種(高校年代)の全チームである。4種は8,648チームに対して調査を実施し、5,686チームの回答があり(回答率65.7%)、3種は7,463チームに対して調査を実施し、2,029チームの回答があり(回答率27.2%)、2種は3,867チームに対して調査を実施し、1,115チームの回答があった(回答率28.8%)。

調査内容は、①年齢ごとのJFA未登録選手数(男女別)、②公認指導者ライセンスを持たないコーチの数、③監督、指導者以外のチームスタッフの数の3項目である。調査方法は、全登録チームに対して調査票を発送し、返信用ハガキで回答してもらった。

[調査結果]

(1) JFA未登録選手数(男女別):登録チーム内で活動する未登録選手(推計値)

① 4種(小学校年代)

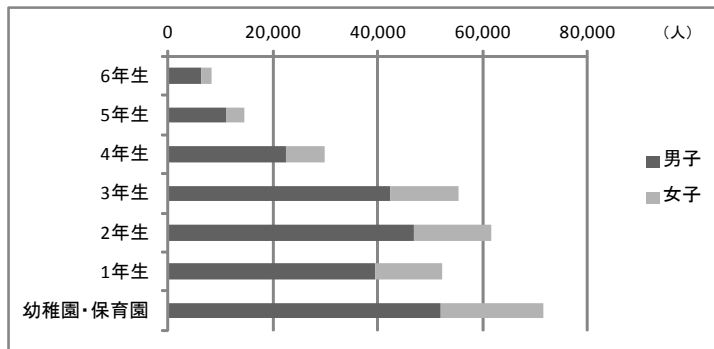
(人)

	男子	女子	合計
6年生	6,191	1,993	8,184
5年生	11,050	3,530	14,581
4年生	22,629	7,345	29,974
3年生	42,323	13,083	55,406
2年生	46,935	14,882	61,817
1年生	39,546	12,657	52,204
幼稚園・保育園	51,984	19,636	71,620
合計	220,659	73,126	293,786

※推計値の算出方法について

本調査の推計値は、以下のとおり、算出した。

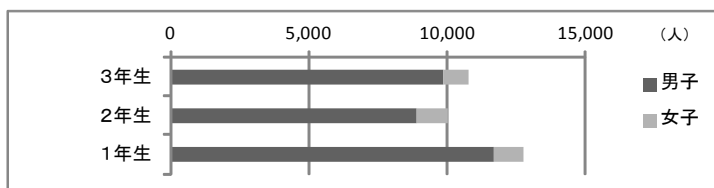
- ①都道府県毎の単純合計値を算出(A)
- ②都道府県毎の回収率を算出(B)
- ③都道府県毎の推計値=(A)÷(B)
- ④全国の推計値=上記③の各都道府県の合計



② 3種(中学校年代)

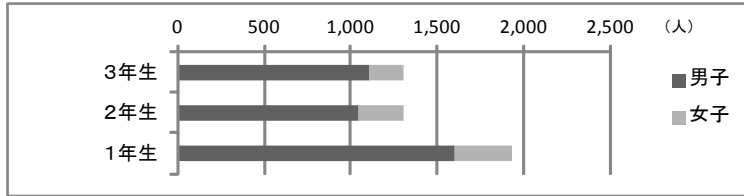
(人)

	男子	女子	合計
3年生	9,860	941	10,801
2年生	8,930	1,087	10,017
1年生	11,700	1,079	12,779
合計	30,490	3,107	33,596



③ 2種(高校年代)

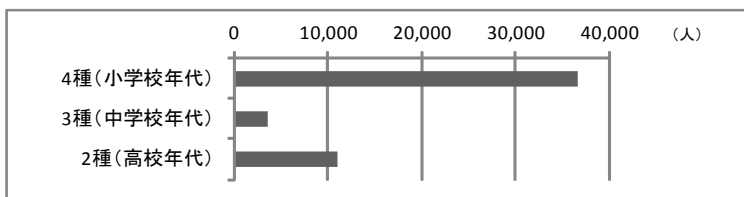
	男子	女子	合計
3年生	1,107	198	1,305
2年生	1,047	254	1,302
1年生	1,597	332	1,929
合計	3,752	784	4,536



4種・3種・2種の登録チーム内で活動する未登録選手数の合計: **331,918** 人 (①+②+③)

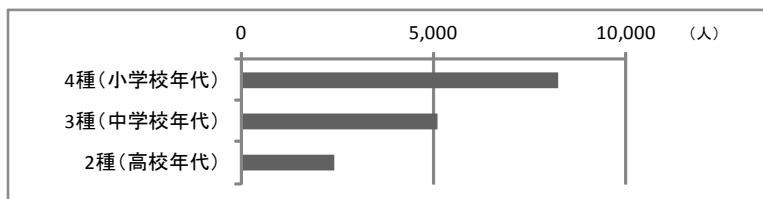
(2) コーチングスタッフ: 登録チーム内で活動する公認指導者ライセンスを持たないコーチ(推計値)

種別	コーチングスタッフ
4種(小学校年代)	36,600
3種(中学校年代)	3,601
2種(高校年代)	11,037
合計	51,238



(3) ボランティア/チームスタッフ: 登録チーム内で活動する監督・指導者以外のチームスタッフ(推計値)

種別	チームスタッフ
4種(小学校年代)	8,252
3種(中学校年代)	5,095
2種(高校年代)	2,408
合計	15,755



2. サッカーファミリー調査(市区郡町村協会)

[調査概要]

2013年から2014年にかけて実施した「JFA全国サッカーファミリー調査」のひとつで、調査対象は、全国の支部・地区/市区郡町村協会である。全国805の協会に対して調査を実施し、566協会の回答があった(回答率70.3%)。

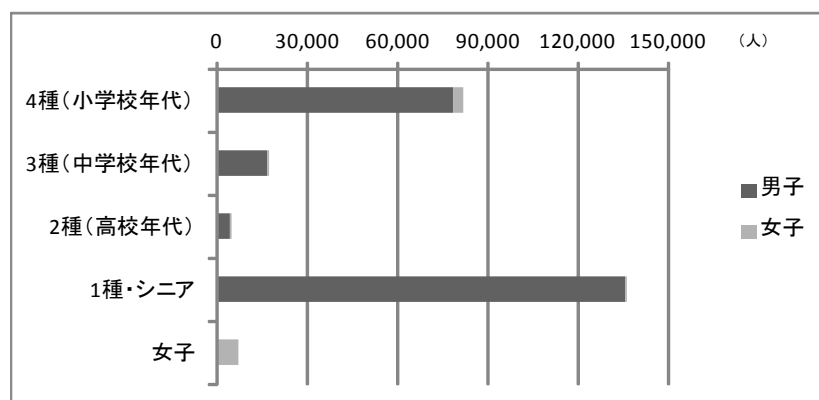
調査内容は、①協会管轄内におけるJFA未登録のチーム数及び選手数、②協会組織におけるスタッフ数の2項目である。調査方法は、全協会に対して調査票を発送し、返信用ハガキで回答してもらった。

[調査結果]

(1) 協会管轄内におけるJFA未登録のチーム数及び選手数(推計値)

(人)

	チーム数	選手数	男子	女子
4種(小学校年代)	2,230	82,261	78,506	3,755
3種(中学校年代)	693	17,166	17,082	84
2種(高校年代)	155	4,433	4,399	34
1種・シニア	6,257	136,598	135,720	877
女子	454	7,282	35	7,247
合計	9,790	247,740	234,014	13,727



(2) 協会組織におけるスタッフ数(推計値)

(人)

項目	役職員数
役職員数	14,231
都道府県協会の役職員との兼任者数	1,173
市区郡町村協会の役職員数(兼任者除く)	13,058

※推計値の算出方法について

本調査の推計値は、以下のとおり、算出した。

①都道府県毎の単純合計値を算出(A)

②都道府県毎の回収率を算出(B)

③都道府県毎の推計値=(A)÷(B)

④全国の推計値=上記③の各都道府県の合計

3. サッカーファミリー調査(フットサル施設)

[調査概要]

2013年から2015年にかけて2度にわたり実施した「JFA 全国サッカーファミリー調査」のひとつで、調査対象は、1)全国のフットサル施設、2)施設利用チーム、3)施設利用選手の大きく3つの対象ごとの調査からなる。施設への調査は、全国1,422のフットサル施設(公共体育館および民間フットサル場)に対して調査を実施し、895施設の回答があった(回答率62.9%)。また、チームへの調査は全国のフットサル施設の利用者から2,103チームの回答があり、選手への調査は全国のフットサル施設の利用者から8,568人の回答があった。

1)フットサル施設への調査内容は、①一般貸し利用の年間延べ利用チーム数、②大会利用の年間延べ利用チーム数、③「個サル」イベントの年間延べ参加者数、④主催スクールの年間会員数の4項目である。

2)施設利用チームへの調査内容は、①チーム構成人数(男女別)、②年間活動回数、③大会への出場有無の3項目である。

3)施設利用選手への調査内容は、①年間参加回数、②JFA選手登録の有無、③サッカーチーム所属の有無、④施設の利用目的、⑤所属チーム数の5項目である。

調査方法は、全施設に対して、施設管理者用/チーム用/選手用の調査票をそれぞれ発送し、所定の調査票にて回答してもらった。

[調査結果]

■一般貸し利用

(人)

項目	数量	単位	調査種別	備考
A 年間チーム利用合計	1,232,246	チーム	1)施設	
B メンバー数	21.4	人	2)チーム	
C 年間チーム利用延べ	26,370,074	チーム	-	A×Bで算出
D 活動回数	48.6	回	2)チーム	
E チーム掛持ち数	1.46	チーム	3)選手	
F 実プレーヤー数	371,640	人	-	C÷D÷Eで算出
G 未登録・未所属率	44.8%	%	3)選手	
H うち未登録・未所属	166,495	人		F×Gで算出

■大会利用

項目	数量	単位	調査種別	備考
A 年間チーム利用合計	227,719	チーム	1)施設	
B メンバー数	24.2	人	2)チーム	
C 年間チーム利用延べ	5,510,790	チーム	-	A×Bで算出
D 活動回数	6.1	回	2)チーム	
E チーム掛持ち数	1.46	チーム	3)選手	
F 実プレーヤー数	618,773	人	-	C÷D÷Eで算出
G 未登録・未所属率	37.7%	%	3)選手	
H うち未登録・未所属	233,277	人		F×Gで算出

■「個サル」利用

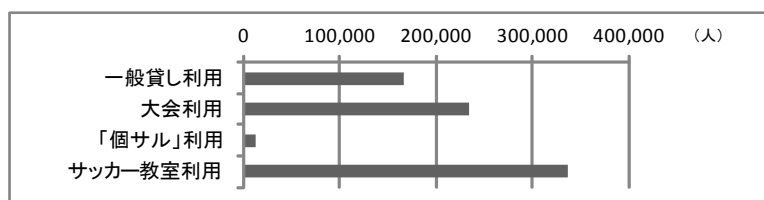
項目	数量	単位	調査種別	備考
A 個サル利用合計	1,274,824	人	1)施設	
B 個サル年間活動回数	60	回	3)選手	
C 実プレーヤー数	21,247	人	-	A÷Bで算出
D 未登録・未所属率	55.5%	%	3)選手	
E うち未登録・未所属	11,792	人		C×Dで算出

■サッカー教室利用

項目	数量	単位	調査種別	備考
A スクール会員合計	527,816	人	1)施設	
B 未登録・未所属率	63.8%	%	2)選手	
C うち未登録・未所属	336,746	人		A×Bで算出

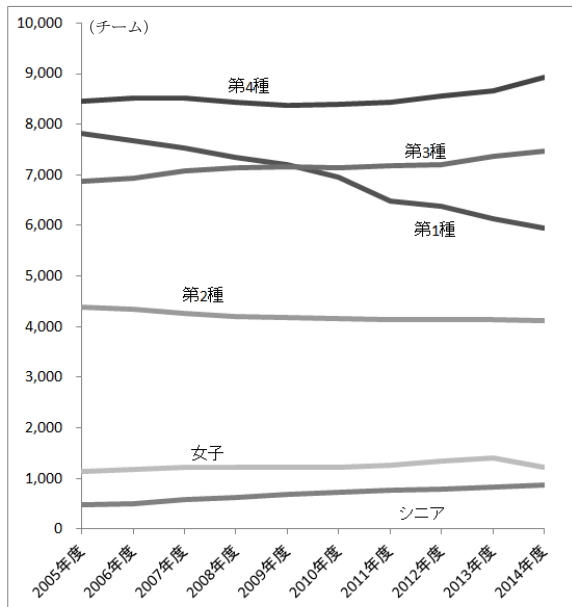
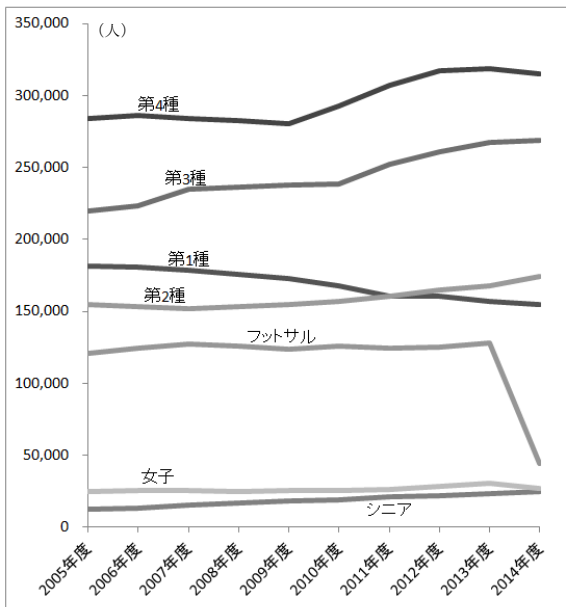
■合計

フットサル施設利用者	748,311	人	JFA登録者・サッカーチーム所属者は除く
------------	---------	---	----------------------

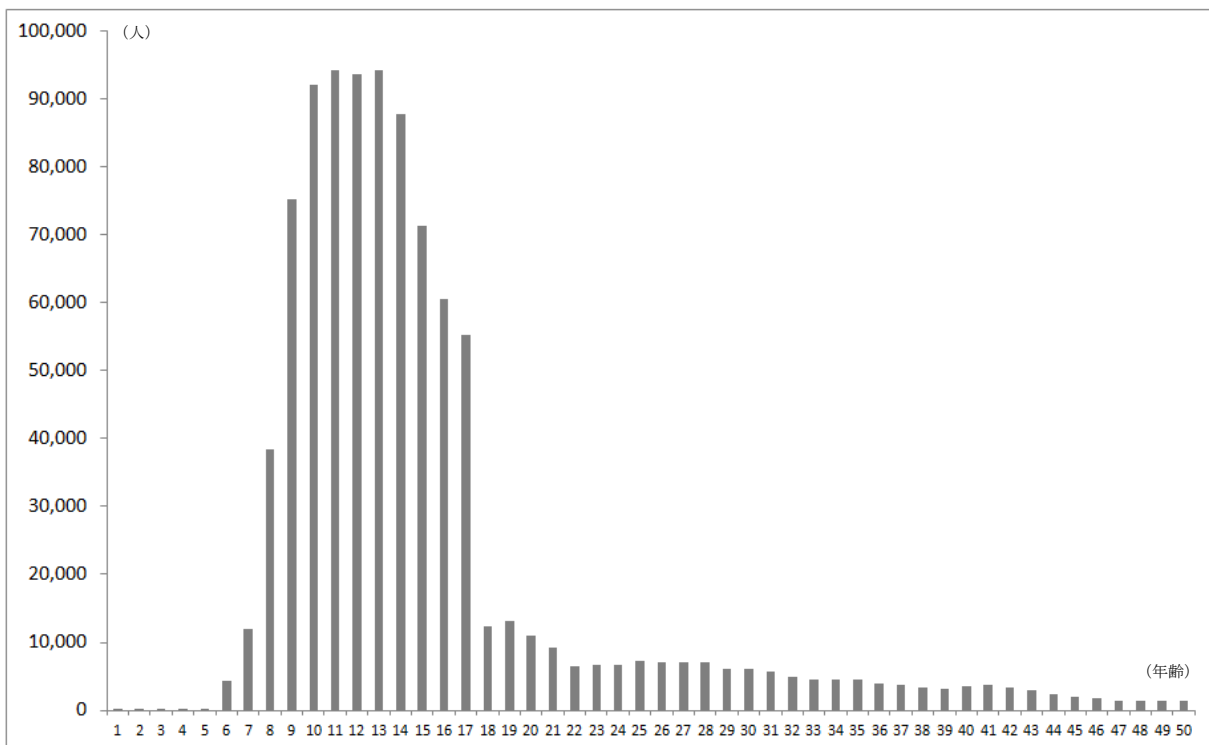


4. 登録選手数推移(2005-2014)

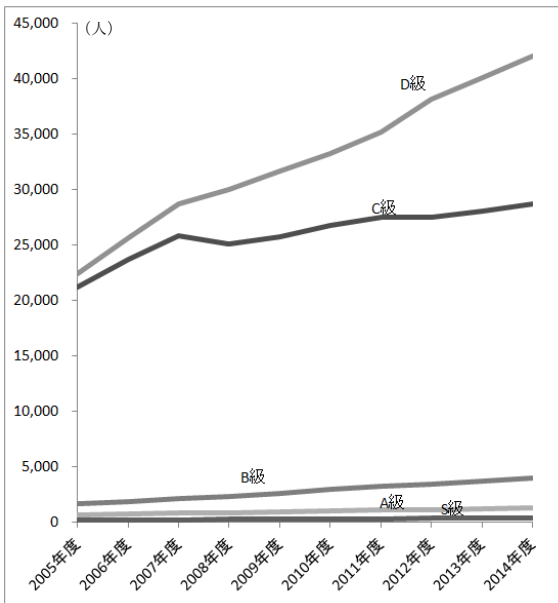
[登録選手/チーム数]



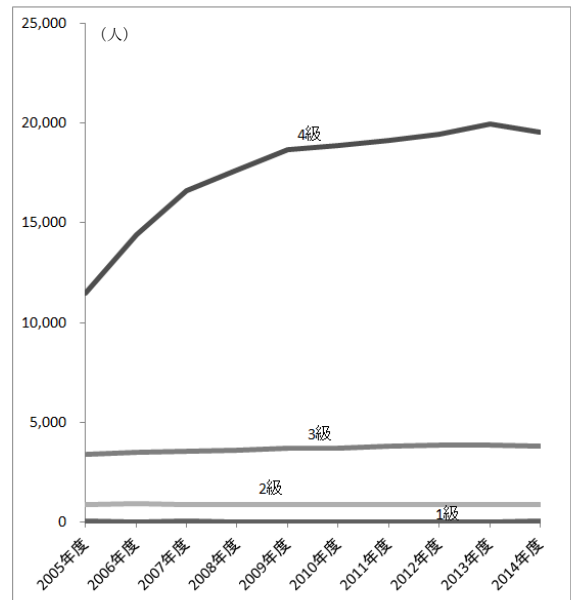
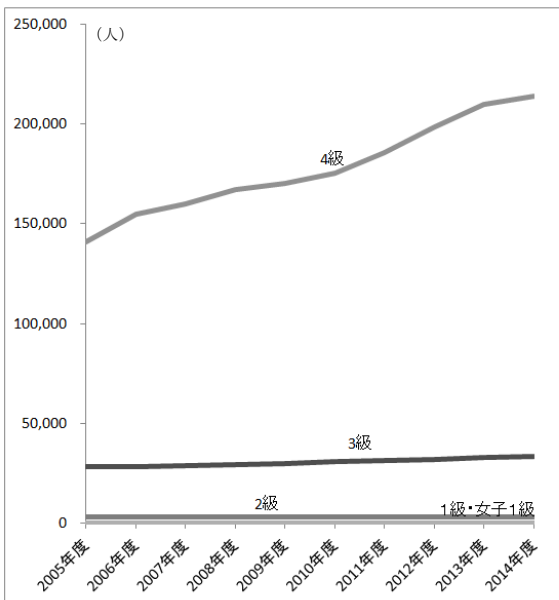
[登録選手(年齢別)]



[指導者]



[審判員(サッカー/フットサル)]



IV. 組織力調査

ここでは、「JFA 中期計画 2015-2022」の補足資料として、「JFA の約束 2015」の組織目標であった「世界でトップ 10 の組織になる」という目標に対する総括として実施した組織力調査について、より詳細なデータを整理する。

1. 組織力調査の概要

JFA では、世界の協会との組織力の比較を行うにあたり、以下の 8 項目について、世界のサッカー協会の比較を行うこととした。調査は、調査開始時の 2014 年の FIFA ランキング上位 20 ヶ国に G20 加盟国を加えた協会を対象に行ったもので、うち、19 協会からの回答を得て、組織力の順位を導き出し、「JFA 中期計画 2015-2022」の本編のランキングとして取りまとめた。

[調査項目・ランキングの算出方法・調査方法]

項目	ランキングの算出方法(調査内容)	調査方法
1)人材	協会の職員数	協会へのアンケート調査
2)普及・登録人口	選手、指導者、審判登録者数の合計によるランキング	協会へのアンケート調査
3)施設	各国における 15,000 人以上収容のスタジアム数によるランキング	協会へのアンケート調査
4)競技会	各国トップリーグの 1 試合あたり平均観客数によるランキング	協会へのアンケート調査
5)競技力	アンダーカテゴリーも含む各カテゴリー代表の FIFA 大会およびオリンピック競技大会の成績に、独自にポイントを定め、成績に応じて加点したランキング	JFA にて独自に集計
6)財政基盤・マーケティング	協会の収支規模	協会へのアンケート調査
7)国内機構	地域 FA カバー、地域 FA 法人化、FIFA 標準規約準拠の有無によるランキング	協会へのアンケート調査
8)国際力	FIFA 理事会・委員会・事務局など、大陸連盟理事会・委員会・事務局などへの輩出数の合計によるランキング	協会へのアンケート調査

[協会へのアンケート調査の対象と回収できた協会]

アメリカ、イタリア、イングランド、インド、オーストラリア、オーストリア、オランダ、カナダ、韓国、コスタリカ、コロンビア、スロバキア、チェコ、チリ、ドイツ、ベルギー、フランス、ポルトガル、ロシア

2. 組織力調査の概要

JFA が独自に行った上記のアンケート調査の具体的な数値については、非公表にすることを前提として調査に協力頂いたため、ここでは詳細のデータは公表致さない。一方、上記調査のうち、JFA にて独自に集計した「競技力」の詳細データについて、次頁以降で整理した。「競技力」は、アンダーカテゴリーも含む各カテゴリー代表の FIFA 大会およびオリンピック競技大会の成績に、下表のとおりポイントを定め、成績に応じて加点したランキングである。

[各大会成績のポイント換算表]

	男子					女子サッカー				フットサル	ビーチサッカー
	WC	CC	Oly	U20	U17	WWC	Oly	WU20	WU17		
1位	5000	2500	2500	2000	1000	2500	2000	1000	500	1000	500
2位	3500	1750	1750	1400	700	1750	1400	700	350	700	350
3位	2500	1250	1250	1000	500	1250	1000	500	250	500	250
4位	2000	1000	1000	800	400	1000	800	400	200	400	200
ベスト8	1000	500	500	400	200	500	400	200	100	200	100
R16	500	250	250	200	100	250	200	100	50	100	50
GL	250	125	125	100	50	125	100	50	25	50	25

[FIFA ランキング上位国の FIFA 大会出場回数と獲得ポイント数(合計)]

	出場回数	Pt	出場回数順位	Pt順位
ドイツ	20	21,025	6	2
アルゼンチン	23	15,825	5	3
コロンビア	12	3,400	16	15
ベルギー	3	2,050	30	23
オランダ	4	8,025	26	10
ブラジル	32	28,025	1	1
ポルトガル	11	5,550	18	12
フランス	16	13,275	10	6
スペイン	20	14,025	6	5
ウルグアイ	17	7,550	8	11
イタリア	16	8,625	10	9
スイス	11	3,000	18	16
イングランド	15	3,850	13	14
チリ	7	2,675	22	19
ルーマニア	0	0	38	38
コスタリカ	14	2,925	15	17
チェコ	6	2,050	23	23
アルジェリア	2	550	34	33
クロアチア	5	850	25	31
メキシコ	25	10,525	4	7
スロバキア	1	500	36	34
チュニジア	4	575	26	32
オーストリア	3	950	30	30
ギリシア	4	1,075	26	28
ウクライナ	6	1,500	23	27
エクアドル	4	1,050	26	29
アメリカ	26	14,675	3	4
コートジボワール	9	1,650	20	25
ボスニア・ヘルツェゴビナ	1	250	36	37
デンマーク	3	400	30	36
ロシア	8	2,100	21	22
南アフリカ	3	1,575	30	26
日本	30	9,800	2	8
韓国	17	5,325	8	13
中国	12	2,375	16	21
オーストラリア	15	2,900	13	18
サウジアラビア	2	450	34	35
カナダ	16	2,625	10	20
インドネシア	0	0	38	38
インド	0	0	38	38

[FIFA ランキング上位国の FIFA 大会成績と獲得ポイント数(男子サッカー)]

MA	World Cup						Confederations Cup						Olympic			
	2006		2010		2014		2005		2009		2013		2008		2012	
	ドイツ	Pt	南アフリカ	Pt	ブラジル	Pt	ドイツ	Pt	南アフリカ	Pt	ブラジル	Pt	北京	Pt	ロンドン	Pt
ドイツ	3	2500	3	2500	1	5000	3	1250								
アルゼンチン	8	1000	8	1000	2	3500	2	1750					1	2500		
コロンビア					8	1000										
ベルギー					8	1000							4	1000		
オランダ	R16	500	2	3500	3	2500							8	500		
ブラジル	8	1000	8	1000	4	2000	1	2500	1	2500	1	2500	3	1250	2	1750
ポルトガル	4	2000	R16	500	GL	250										
フランス	2	3500	GL	250	8	1000					2	1750				
スペイン	R16	500	1	5000	GL	250			3	1250	3	1250			GL	125
ウルグアイ			4	2000	R16	500					4	1000	8	500	GL	125
イタリア	1	5000	GL	250	GL	250			GL	125						
スイス	R16	500	GL	250	R16	500									GL	125
イングランド	8	1000	R16	500	GL	250									(8)	
チリ			R16	500	R16	500										
ルーマニア																
コスタリカ	GL	250			8	1000										
チェコ	GL	250														
アルジェリア					R16	500										
クロアチア	GL	250			GL	250										
メキシコ	R16	500	R16	500	R16	500	4	1000			GL	125			1	2500
スロバキア			R16	500												
チュニジア	GL	250					GL	125								
オーストリア																
ギリシア			GL	250	R16	500	GL	125								
ウクライナ	8	1000														
エクアドル	R16	500			GL	250										
アメリカ	GL	250	R16	500	R16	500			2	1750			GL	125		
コートジボワール	GL	250	GL	250	GL	250							8	500		
ボスニア・ヘルツェゴビナ					GL	250										
デンマーク			GL	250												
ロシア																
南アフリカ			GL	250					4	1000						
日本	GL	250	R16	500	GL	250	GL	125			GL	125	GL	125	4	1000
韓国	GL	250	R16	500	GL	250						GL	125	3	1250	
中国												GL	125			
オーストラリア	R16	500	GL	250	GL	250	GL	125				GL	125			
サウジアラビア	GL	250														
カナダ																
インドネシア																
インド																

[FIFA ランキング上位国の FIFA 大会成績と獲得ポイント数(男子サッカー)]

MA	Under 20										Under 17									
	2005		2007		2009		2011		2013		2005		2007		2009		2011		2013	
	オランダ	Pt	カナダ	Pt	エジプト	Pt	コロンビア	Pt	トルコ	Pt	ペルー	Pt	韓国	Pt	ナイジェリア	Pt	メキシコ	Pt	UAE	Pt
ドイツ	8	400			8	400						3	500			3	500			
アルゼンチン	1	2000	1	2000			8	400				8	200	R16	100	R16	100	4	400	
コロンビア	R16	200					8	400	R16	200			R16	100	4	400				
ベルギー													GL	50						
オランダ	8	400									3	500			GL	50	GL	50		
ブラジル	3	1000			2	1400	1	2000			2	700	R16	100			4	400	8	200
ポルトガル			R16	200			2	1400	R16	200										
フランス							4	800	1	2000			8	200			8	200		
スペイン	8	400	8	400	R16	200	8	400	8	400			2	700	3	500				
ウルグアイ			R16	200	R16	200	GL	100	2	1400	GL	50			8	200	2	700	8	200
イタリア	8	400			8	400					GL	50			8	200			R16	100
スイス	GL	100													1	1000				
イングランド					GL	100	R16	200	GL	100							8	200		
チリ	R16	200	3	1000					8	400										
ルーマニア																				
コスタリカ			GL	100	4	800	R16	200			8	200	R16	100	GL	50				
チェコ			2	1400	R16	200											GL	50		
アルジェリア															GL	50				
クロアチア							GL	100	R16	200									GL	50
メキシコ			8	400			3	1000	R16	200	1	1000			R16	100	1	1000	2	700
スロバキア																				
チュニジア													R16	100					R16	100
オーストリア			4	800	GL	100													GL	50
ギリシア									R16	200										
ウクライナ	R16	200																		
エクアドル							R16	200									R16	100		
アメリカ	R16	200	8	400	GL	100			GL	100	8	200	R16	100	R16	100	R16	100		
コートジボワール											GL	50					R16	100	8	200
ボスニア・ヘルツェゴビナ																				
デンマーク																	GL	50		
ロシア																			R16	100
南アフリカ					R16	200														
日本	R16	200	R16	200									GL	50	GL	50	8	200	R16	100
韓国	GL	100	GL	100	8	400	R16	200	8	400			GL	50	8	200				
中国	R16	200									8	200								
オーストラリア	GL	100			GL	100	GL	100	GL	100	GL	50					R16	100		
サウジアラビア							R16	200												
カナダ	GL	100	GL	100													GL	50	GL	50
インドネシア																				
インド																				

[FIFA ランキング上位国の FIFA 大会成績と獲得ポイント数(女子サッカー)]

MA	World Cup (女子)				Olympic (女子)				Under 20 (女子)									
	2007		2011		2008		2012		2006		2008		2010		2012		2014	
	中国	Pt	ドイツ	Pt	北京	Pt	ロンドン	Pt	ロシア	Pt	チリ	Pt	ドイツ	Pt	日本	Pt	カナダ	Pt
ドイツ	1	2500	8	500	3	1000			8	200	3	500	1	1000	2	700	1	1000
アルゼンチン	GL	125			GL	100			GL	50	GL	50			GL	50		
コロンビア			GL	125			GL	100					4	400				
ベルギー																		
オランダ																		
ブラジル	2	1750	8	500	2	1400	8	400	3	500	8	200	GL	50	GL	50	GL	50
ポルトガル																		
フランス			4	1000			4	800	8	200	4	400	GL	50			3	500
スペイン																		
ウルグアイ																		
イタリア															GL	50		
スイス									GL	50			GL	50	GL	50		
イングランド	8	500	8	500			(8)				8	200	GL	50			GL	50
チリ											GL	50						
ルーマニア																		
コスタリカ													GL	50			GL	50
チェコ																		
アルジェリア																		
クロアチア																		
メキシコ			GL	125					GL	50	GL	50	8	200	8	200	GL	50
スロバキア																		
チュニジア																		
オーストリア																		
ギリシア																		
ウクライナ																		
エクアドル																		
アメリカ	3	1250	2	1750	1	2000	1	2000	4	400	1	1000	8	200	1	1000	8	200
コートジボワール																		
ボスニア・ヘルツェゴビナ																		
デンマーク																		
ロシア									8	200								
南アフリカ							GL	100										
日本	GL	125	1	2500	4	800	3	1000			8	200	GL	50	3	500		
韓国													3	500	8	200	8	200
中国	8	500			8	400			2	700	GL	50			GL	50	GL	50
オーストラリア	8	500	8	500					GL	50								
サウジアラビア																		
カナダ	GL	125	GL	125	8	400	3	1000	GL	50	GL	50			GL	50	8	200
インドネシア																		
インド																		

[FIFA ランキング上位国の FIFA 大会成績と獲得ポイント数(女子サッカー・フットサル・ビーチサッカー)]

MA	Under 17(女子)								Futsal				Beach							
	2008		2010		2012		2014		2008		2012		2008		2009		2011		2013	
	ニュージーランド	Pt	トリニダード・トバゴ	Pt	アゼルバイジャン	Pt	コスタリカ	Pt	ブラジル	Pt	タイ	Pt	マルセイユ	Pt	ドバイ	Pt	イタリア	Pt	タヒチ	Pt
ドイツ	3	250	8	100	4	200	GL	25												
アルゼンチン									GL	50	8	200	8	100	GL	25	GL	25	8	100
コロンビア	GL	25			GL	25	GL	25			4	400								
ベルギー																				
オランダ																			GL	25
ブラジル	GL	25	8	100	8	100			1	1000			1	500	1	500	2	350	3	250
ポルトガル									GL	50	8	200	3	250	3	250	3	250		
フランス	GL	25			1	500							8	100						
スペイン			3	250			2	350	2	700	2	700	4	200	8	100			2	350
ウルグアイ					GL	25			GL	50			8	100	4	200				
イタリア							3	250	3	500	3	500	2	350	8	100	8	100		
スイス															2	350	GL	25		
イングランド	4	200																		
チリ			GL	25																
ルーマニア																				
コスタリカ	GL	25					GL	25			GL	50			GL	25				
チェコ									GL	50	R16	100								
アルジェリア																				
クロアチア																				
メキシコ			GL	25	GL	25	8	100			GL	50	GL	25			8	100		
スロバキア																				
チュニジア																				
オーストリア																				
ギリシア																				
ウクライナ									GL	50	8	200					GL	25	GL	25
エクアドル																				
アメリカ	2	350			GL	25			GL	50									GL	25
コートジボワール															GL	25			GL	25
ボスニア・ヘルツェゴビナ																				
デンマーク	8	100																		
ロシア									4	400	8	200	8	100	8	100	1	500	1	500
南アフリカ			GL	25																
日本	8	100	2	350	8	100	1	500	GL	50	R16	100	GL	25	8	100	GL	25	8	100
韓国	8	100	1	500																
中国					GL	25	GL	25	GL	50										
オーストラリア											GL	50								
サウジアラビア																				
カナダ	8	100	GL	25	8	100	8	100												
インドネシア																				
インド																				

JFA 中期計画 2015-2022
別添資料

2015年5月

公益財団法人日本サッカー協会 発行

〒113-8311 東京都文京区サッカー通り(本郷 3-10-15)JFA ハウス

TEL:03-3830-2004(代表) FAX:03-3830-2005



公益財団法人日本サッカー協会